

第7回
全国博物館ボランティア研究協議会
概 要

平成19年12月10日

独立行政法人 国立科学博物館

目次

はじめに	-----	1
1. 実施の概要		
(1) 実施要項	-----	2
(2) 参加者の概要	-----	3
2. 全国博物館ボランティアの現状と課題（アンケート調査結果を中心に）	-----	4
3. 国立科学博物館教育ボランティア制度の概要	-----	8
4. 記念講演		
「“愛づる（めづる）”という言葉からの広がり」		
JT 生命誌研究館館長 中村桂子	-----	16
5. テーマ別分科会		
第1分科会 「これからの博物館運営とボランティア活動」（職員対象）	-----	25
第2分科会 「体験学習とボランティア～ボランティアの企画力を生かす～」	-----	31
第3分科会 「ボランティアによる展示解説」	-----	34
第4分科会 「地域との連携」	-----	41
6. 国立科学博物館 教育ボランティア協力者	-----	46
7. おわりに	-----	46

はじめに

このたび、「第7回全国博物館ボランティア研究協議会」の概要をまとめました。

国立科学博物館では、昭和61年1月に上野本館に「教育ボランティア」制度を導入しました。教育ボランティア制度は昭和60年上野本館に開設した青少年向けの参加体験型展示「たんけん館」における青少年への指導助言を行うために導入され、その後たんけん館での活動を中心に、施設や展示の案内、講座や観察会等の行事の運営および補助など、学習支援活動全般にわたって活動を広げました。現在、教育ボランティアの活動は、国立科学博物館の欠くことのできない一翼を担うと同時に、その歩みは全国の博物館ボランティア活動の牽引役を果たしてきたと自負いたしております。

平成7年1月、教育ボランティア制度10周年を記念して、国立科学博物館では、全国の博物館ボランティアおよびボランティア担当者が、博物館におけるボランティア活動の一層の充実と普及のための課題について研究協議を行う場を提供することを目的として、全国博物館ボランティア研究協議会を開催いたしました。その後隔年で同協議会は開催を続け、平成19年12月には第7回目を迎えました。本概要はこの協議会の報告書です。

博物館は未来に引き継ぐべき公共の財産といえます。その博物館が社会に認知され、社会に支えられ続けるために、これからますますボランティアの方々の支援が求められることと思います。本報告書がボランティアの方々にとっても、博物館にとっても豊かなボランティア活動のあり方を探る一助になることを願ってやみません。

国立科学博物館
ボランティア活動・人材育成推進室

1. 実施の概要

(1) 実施要項

- 1 趣 旨 全国の博物館ボランティア及びボランティア活動担当者が、博物館におけるボランティア活動の一層の充実と普及のための課題について研究協議を行った。
- 2 主 催 独立行政法人国立科学博物館
- 3 後 援 文部科学省, (財)日本博物館協会, 全国科学博物館協議会
- 4 期 日 平成19年12月10日(月)
- 5 会 場 国立科学博物館

6 プログラム

9:30- 受付開始

10:00-10:20 開会式・プログラム説明

10:20-11:00 ①全国博物館ボランティアの現状と課題(アンケート調査結果を中心に)
②国立科学博物館教育ボランティアの概要

11:00-12:00 分科会事例報告者からの事例報告要旨説明

12:00-13:30 昼食・休憩・日本館見学

13:30-15:00 テーマ別分科会

第1分科会 これからの博物館運営とボランティア活動(職員対象)

助言者:国立科学博物館展示・学習部学習課長 小川 義和

事例報告者:九州国立博物館交流課ボランティア室長 糸井 茂

平成17年の開館当初からボランティア制度を導入し、現在3年目となる九州国立博物館は、第1期任期終了の節目を迎え、ボランティア・マネージャー制度を検討するなど新しいシステムを模索している。現状や課題について話を伺い、協議した。

第2分科会 体験学習とボランティア～ボランティアの企画力を生かす～

助言者:国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター長 馬場祐次朗

事例報告者:北九州市環境学習サポーター 上永 陽一

市民の体験学習への要望は高まる一方で、ボランティアの多様なスキルを生かした体験学習プログラムの展開は、来館者にとっての博物館の魅力が増すと同時に、ボランティアにとっても大変やりがいのある活動である。ボランティアの企画を積極的に取り入れている北九州市環境ミュージアムの方から話を伺い、協議を行った。

第3分科会 ボランティアによる展示解説

助言者:帝京科学大学教授 石田 戩

事例報告者:世田谷美術館学芸員 東谷千恵子

ボランティアによる展示解説は、展示と来館者を取り持ち展示の魅力を引き出す活動として、来館者の満足度を高め、社会に

博物館が広く認知されていく上で欠かせない要素となりつつある。ボランティアを「美術館の達人」と位置づけ、ユニークな活動を行っている世田谷美術館の事例紹介を受け、ボランティアによる展示の案内・解説について協議した。

第4分科会 地域との連携

助言者：東京大学大学院准教授 鈴木 眞理

事例報告者：平塚市博物館協議会委員・平塚の空襲と戦災を記録する会 江藤 巖

「相模川流域の自然と文化」をテーマとする同館は、地域の人たちが日常的に何度も繰り返して利用する中で地域の再発見ができる地域博物館を目指して活動を続けてきた。開館20年がたち、博物館の資料収集・出版・展示・解説など多くの面に市民の参加が得られ、博物館活動は大変盛り上がっている。地域博物館としての歩みと展望について紹介いただき、協議を行った。

15:10～15:50 分科会報告及び総括

16:00～17:30 記念講演「^め“愛づる”という言葉からの広がり」

講師：中村 桂子（JT生命誌研究館館長）

17:45～19:15 情報交換会

(2) 参加者の概要

	参加者数			館・機関数
	ボランティア	職員	計	
総合博物館	3	12	15	11
人文系博物館	26	28	54	30
科学系博物館 (国立科学博物館)	12 (26)	28 (6)	40 (32)	21 (1)
美術館	13	18	31	17
動物園・植物園 ・水族園	2	7	9	4
教育委員会・ 設立準備室等	0	8	8	6
計	56	101	157	89

※ 講師、助言者は除く

2. 全国博物館ボランティアの現状と課題 (アンケート調査結果を中心に)

報告：国立科学博物館 展示・学習部学習課
ボランティア活動・人材育成推進室長 亀井 修

1 概要

本会議に先立ち、参加各館からそれぞれのボランティア活動の状況に関するアンケート形式の調査を依頼し、90館より回答を得た。回答を受けた館のうち78館で既にボランティア制度が導入済みであり、残りの12館も検討中の段階にあり、回答を受けた館のすべてでボランティア制度についての動きがあることがわかる(スライド1)。

ボランティア制度を導入した時期では、もっとも古い区分として1988年度以前が11件、その後の10年間で17件、1999年以降の9年間で46件と区分ごとに増大の傾向にあることが伺える(スライド2)。同様な傾向は「平成17年度社会教育調査」の結果からも読み取ることができる(スライド3)。

ボランティア制度を導入する館が増大する一方で博物館等の施設の総数に占める割合は比較としてあまり高まっていないことも同調査から示されている(スライド4)。これは、ボランティア制度を導入することのハードルが、これらの機関や施設にとって決して低いものではないことを示唆している。今後も継続的な配慮を必要とする重要な課題の一つであるといえよう。

ボランティアの活用内容の現状については、展示解説・案内、ガイドツアー、監視等の従来型の活動が主流であるが、これに加えて、教育普及事業等の企画運営や研究活動、資料収集・調査等への参画あるいは、清掃・保守など、博物館のより基幹的業務への関与が行われていることが明らかになっている(スライド5)。

活動者の年齢の分布の頻度は、40～60歳代にかけて高く、ピークは50歳代にあった。70歳代以上と30歳代以下については、それぞれ1と2(件)の回答が得られている(スライド6)。活動については、任期や定年を特に定めずに一般公募で定期的に募集され、館主導による運営で、毎日活動あるいは曜日を決めてといった形で定期的に行われている場合が多い(スライド7～10)。多くの館では研修制度が整えられているが、交通費は支給されていない傾向にある(スライド11)。

これらの集計結果は、平成19年12月に実施された第7回全国博物館ボランティア研究協議会参加館および各団体各位から提出された資料を基に作成された。関係各位に厚く謝意を表します。

2 発表資料 (スライド)

2007年度のアンケート集計結果

• 回答協力機関・団体	90 館
• うち導入済	78 館
• 検討中	12 館



3 導入時期

• ~1988(S63)年度	11 件
• 1989(H元) ~1993(H5)年度	4 件
• 1994(H6) ~1998(H10)年度	13 件
• 1999(H11) ~2003(H15)年度	25 件
• 2004(H16) ~2007(H19)	21 件
• 不明	4 件

• 複数回答の場合は、一番古い時期。

スライド1

スライド2

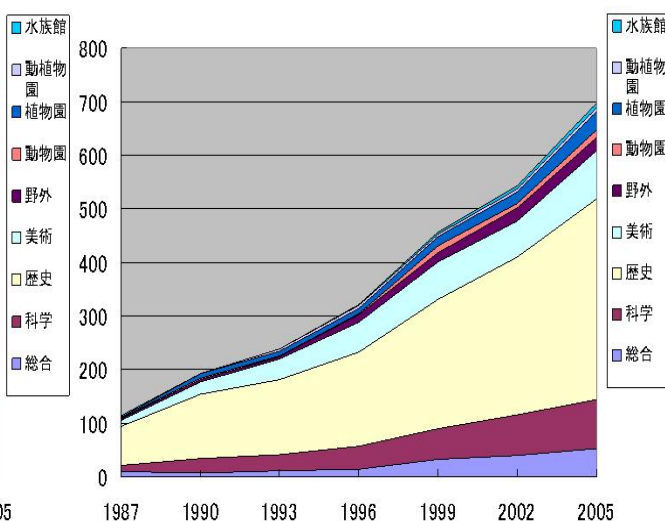
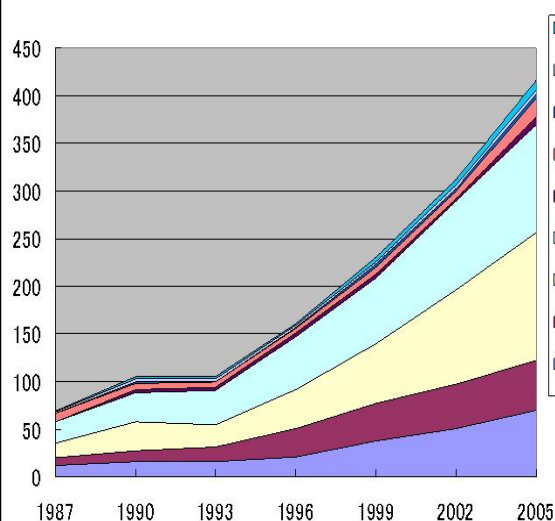
ボランティア導入館数

登録博物館・博物館相当施設 416

博物館類似施設 697

ボランティア導入館数(登録博物館・博物館相当施設)

ボランティア導入館数(博物館類似施設)



出典:『社会教育調査』

スライド3

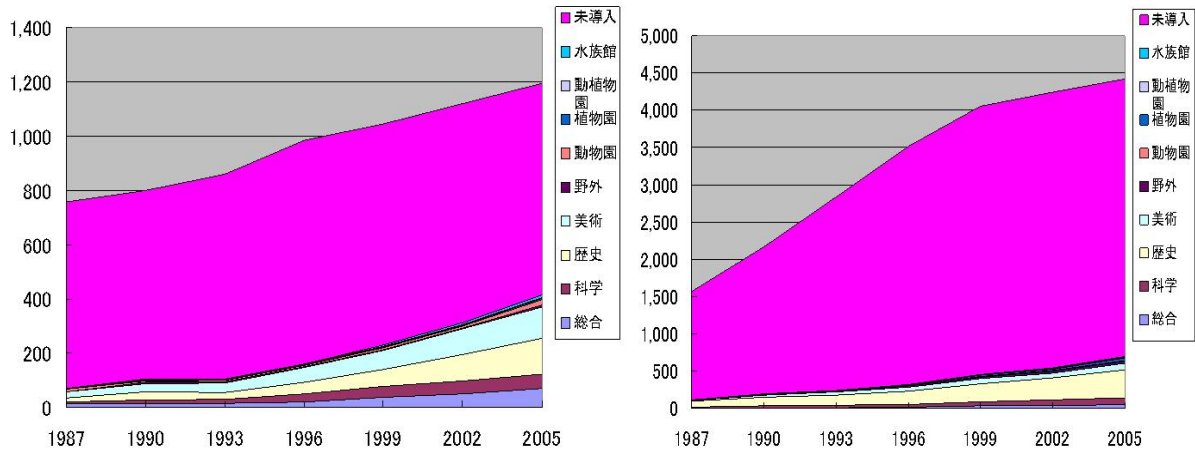
ボランティア導入館数(対総数)

登録博物館・博物館相当施設 416/1196

博物館類似施設 697/4418

ボランティア導入館数(登録博物館・博物館相当施設)

ボランティア導入館数(博物館類似施設)



出典:『社会教育調査』

スライド 4

4 現在の活動の内容

① 展示解説・案内	52	件
② ガイドツアー	24	件
③ 教育普及事業の企画運営等	48	件
④ 案内・誘導整理	37	件
⑤ 作品の監視	12	件
⑥ 販売・営業・図録等発送	1	件
⑦ 展示維持・保守・清掃	13	件
⑧ 資料収集・調査	22	件
⑨ 研究活動等	16	件
⑩ その他	28	件

・ 複数回答。多くは①～④、⑤をチェックした機関はすべて⑦または⑧を同時にチェックしているため、展示室等での案内の稼働を監視していると思われる。

6 活動者について

- ・ 組織の人数の分布
7～670 人
- ・ 平均年齢の分布

10代～30代	2	件
40代	10	件
50代	26	件
60代	22	件
70代	1	件
不明	17	件
- ・ 10代～30代と回答した機関は募集対象を中学生や大学生に限定。

スライド 5

スライド 6

7 活動形態

- ① 毎日活動(休館日を除くほぼ毎日) 29件
- ② 特定の曜日に活動 29件
- ③ 企画展等特別の期間に活動 16件
- ④ その他 36件

・ 複数回答。特定の曜日は「土・日・祝日」が多い。「その他」は、「グループにより異なる」「イベント実施時」「団体予約のあったとき」など。

スライド7

8 運営方法

- ① 館主導による運営 47 件
- ② ボランティア組織主導の運営 16 件
- ③ 両者の共同での運営 16 件
- ④ その他 5 件

・ 複数回答。その他は、「組織無し」「担当の研究者による運営」など。

スライド8

9 募集

- ① 時期
 - 定期 47 件
 - 不定期 33 件(複数回答あり)
- ② 方法
 - 一般公募 68 件
 - 募集対象を特定 6 件
 - 不明 4 件

スライド9

10 登録

- ① 定年制
 - ある 4 件
 - ない 74 件
- ② 任期制
 - ある(更新無し) 18 件
 - ない(希望により更新可を含む) 60 件

スライド10

12 交通費

- 全額支給 6 件
- 一部支給 20 件
- 支給していない 52 件

・ 「一部支給」には、定額制(1回1律1,000円等)、一部に限定、上限を設定などが含まれる。

スライド11

3. 国立科学博物館教育ボランティア制度の概要

報告：国立科学博物館教育ボランティア 三浦 恵美

1 概要

① たんけん館の始まりと教育ボランティア制度の始まり

昭和60年、国立科学博物館上野本館に青少年向けの参加体験型展示「たんけん館」を開設した（スライド1, 3～5）。そこで青少年への指導助言を行う教育普及を専門とする職員（スライド2）と一緒に、展示の楽しみ方を子どもたちに伝える活動をするボランティアの導入が検討された。昭和61年1月に8名の志望者により教育ボランティア制度が発足した（スライド6～8）。参加体験型展示「たんけん館」はその後改修を経て、現在は「たんけん広場・身近な科学」「たんけん広場・発見の森」となっている（スライド9）。平成19年度現在教育ボランティアが開館中は毎日常駐して来館者に働きかけている。

② 自主性の高いグループ活動の始まり

教育ボランティアは現在様々な自主活動グループを作って、来館者の学習用資料の整備・体験型イベントの企画・運営などを行っている。その端緒となったのは、昭和62年の「科学おもちゃ」の企画・開発である（スライド10）。その後こどもの日や夏休みの「サイエンススクエア」という、子ども向けの体験型イベントを集中的に実施する事業を経て、自主企画の立案・実行もふくめてボランティアは継続して協力を重ねてきた。平成10年には、「たんけん広場・発見の森」をより深く理解するための観察・実習教材を「クモ」「たね」「いろいろな砂」「古生物」などテーマ毎にひとまとめに箱に納めた「森の標本箱」の作成を館の職員とボランティアが協同で開始した。その際ボランティアは箱の種類ごとに「森の標本箱活動班」をつくった（スライド11, 12）。これらの班は、箱の作成後も中に納められている標本の点検と更新を継続的に行っている。また、体験型のイベントを企画・実施する活動も従前よりも一層活発に行うようになった。現在では「教育ボランティア特別企画」という名称で、毎週末ボランティアによる自主企画の体験型イベントを実施している（スライド13）。さらに、森の標本箱活動班が中心となって、平成19年度に箱の内容を見直すとともに使用の手引きを作成し、全教育ボランティア対象の研修を実施し、展示室内での森の標本箱の活用を活性化させた。平成19年12月には教育ボランティア20周年記念事業「ボランティアフェスタ」を開催し、ボランティアによる自主企画イベントを館内15カ所で実施し、ボランティアの活動成果を来館者とともに楽しむことができた（スライド14）。

③ 相互のコミュニケーションの充実

ボランティア相互のコミュニケーションのために、平成元年より「教育ボランティア通信」、平成2年より「上野の森」を発行している（スライド15）。

④ インフォメーション活動の提案

国立科学博物館における案内所は、平成元年 11 月に教育ボランティアによる「見学相談コーナー」を設置したことに始まる。見学相談コーナーは、館内が複雑でわかりづらく困っている来館者の力になりたいというボランティアの気持ちから始まった（スライド 16, 17）。

⑤ 日常的なワークショップの実施～補助から企画・指導へ～

日常的に観察や工作などのワークショップを実施するようになったのは、平成 3 年の「スタディールーム」の設置からとなる（スライド 18, 19）。教育ボランティアは当初は補助的な活動をしていたが、「スタディールーム」を引き継いだ「かはく・たんけん教室」に活動の場を移し、平成 18 年度からは参加者への指導の中心となっている（スライド 20）。さらに、一部プログラムでは作成段階から携わっている。

⑥ 全国的な活動

国立科学博物館は、全国の博物館ボランティア及びボランティア活動担当者が、ボランティア活動に関する諸問題について研究協議を行う「全国博物館ボランティア研究協議会」を隔年度に主催しているが、その運営には大勢の教育ボランティアが大勢協力している（スライド 21）。

⑦ 特別展との連携

教育ボランティアの展示室での活動は、制度発足当初は常設展示室に限られていた。平成 9 年の「ふしぎ大陸南極展」から、体験型の事業や展示の企画立案・製作・運営などしだいに多くの領域に関わるようになった（スライド 22～24）。

⑧ 体験型展示室から博物館全館の活動へ

教育ボランティアの常設展示室での活動は、制度発足当初は参加体験型展示に限られていた。平成 10 年に常設展示の見どころを全館的に来館者に案内するとともに、効率良く見学できるよう、「ガイドツアー」の活動を開始した（スライド 25）。その後、平成 16 年 11 月には、地球館のグランドオープンを受けて、全展示室において教育ボランティアが常駐して来館者に展示の案内や学習支援活動を実施することとなった。（スライド 26）これを契機に、これまでの教育ボランティア制度を見直し、次の 2 点を改善した。一つは、従来型のたんけん広場を中心に活動する「体験学習支援ボランティア」と、ある程度の専門性を有し、動物、植物、地学、人類、理工学のいずれかの分野を選択して一般の展示室を中心に活動する「展示学習支援ボランティア」に区分した。さらに、活動日について、同一曜日に週 1 回活動する「曜日別ボランティア」と、土日祝日・夏休み等の児童生徒の長期休業期間に年間 15 日以上活動する「ホリデーボランティア」に区分した（スライド 27）。

平成 19 年にオープンした日本館の常設展示室でも教育ボランティアが常駐している。

このように、教育ボランティア制度は 20 年のあゆみのなかで、活動内容はより幅広くなるとともに、よりボランティアの創造性と専門性・個性を生かす方向に進んできたと言える。

発足当初は 8 名だった教育ボランティアは、平成 19 年度、333 名となっている（スライド 28）。

2 発表資料

① たんけん館の始まりと教育ボランティア制度の始まり



スライド1



スライド2



スライド3



スライド4



スライド5



スライド6



学校団体へ向けたオリエンテーション

スライド7



研修の様子

スライド8



スライド9

②自主性の高いグループ活動の広がり



グループ活動の始まり「科学おもちゃ工作グループ」

スライド10

森の標本箱活動(活動から8年を迎えました)

クモ	原虫	シダ	森の色
蜘蛛目入標本、標本製作セット	昆虫の特集、昆虫のからだ	シダの胞子作り、胞子標本、プレート標本	標本材料の製造、基本染め、絵の具製作セット
主要動物	たまご	たね	しいたけの標本
プレート標本、フィルム(はらわた)動物の足あと	目入標本、アース入り標本	たねの標本、必要に応じて種別標本	プレート標本、標本箱、標本物の海軍の箱
動物の足あと	冬芽	押し葉の標本	岩石
足あとシートと足あとスリッパ	冬芽標本自作、目入標本	押し葉標本、押し葉の標本、その他新聞紙の活用	岩石の標本、その他新聞紙の活用
へび	葉形標本/キノコ	森のおそび(木の腐工作)	古生物
準備、おまけ、教員説明、冊	葉形標本の製作、葉形標本の製作	葉形標本の製作、葉形標本の製作	化石の標本、化石の標本の製作

スライド11



森の標本箱カウンター活動開始

スライド 12



教育ボランティア
特別企画

H19年度は10企画以上が参加
土日の博物館をにぎやかにしています。

スライド 13



スライド 14

③相互のコミュニケーションの充実



スライド 15

④インフォメーション活動の提案



スライド 16



スライド 17

⑤日常的なワークショップの実施～補助から企画・指導へ～



スライド 18



スライド 19



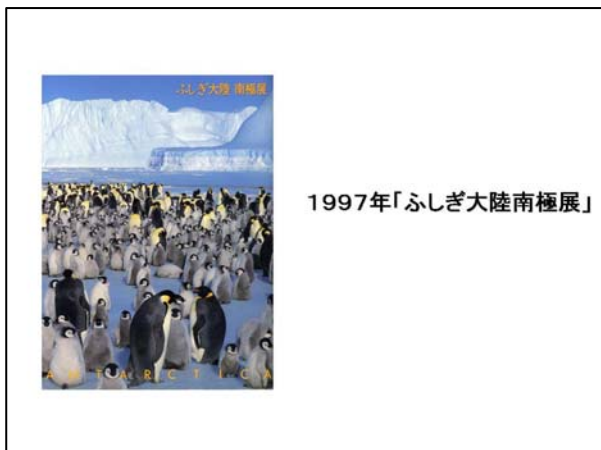
スライド 20

⑥全国的な活動

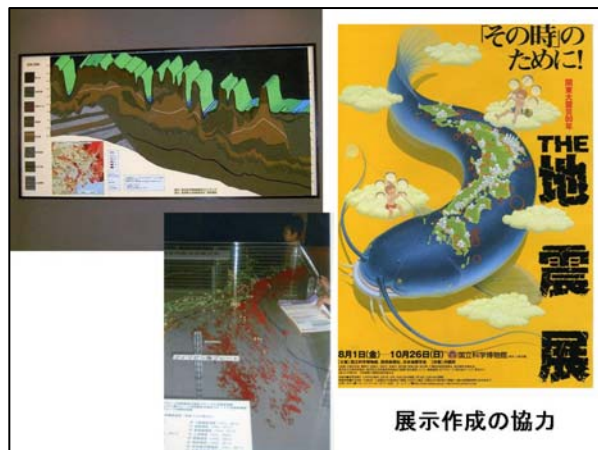


スライド 21

⑦特別展との連携のはじまり



スライド 22



スライド 23



特別展との連携(企画・立案・運営・指導)へ

スライド 24

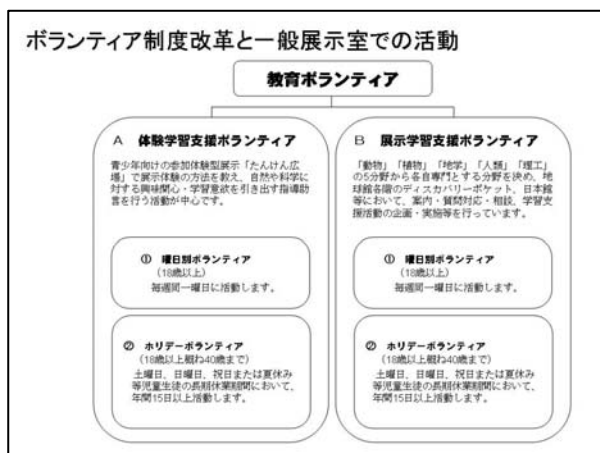
⑧体験型展示室から博物館全館への活動へ



スライド 24



スライド 26



スライド 27

ボランティア登録者

発足当時 8名

↓

現在 333名

スライド 28

4. 記念講演 “愛づる” という言葉からの広がり

講師：J T生命誌研究館館長 中村 桂子

1 はじめに

最近の科学をめぐって私がふだん考えていることをお話ししたいと思います。きょうは科学館だけではなく、博物、歴史、美術の方たちもいらっしゃるということですが、美術や歴史にも、今、科学がどうなっているかということは関係があるだろうと思いますので、歴史や美術がお仕事の方も、「関係ないや」と思わずにお聞きいただけたらと思います。

きょうは大きな題として「愛づる」という言葉を出しました。私は、科学の中で、「生きている」ことを見つめ、そこから私たちはどう生きるかを探り出すという仕事をしています。とても難しいことで、答えは出ないのですが、それでも、今、21世紀という世紀に向けて考えなければいけない大事なことと思っています。

具体的には、地球環境問題があります。地球温暖化もその一つです。最近、北極の写真をよく見ます。長い間おつき合いしているドキュメンタリー製作者が、先日北極へ行って撮ってきたビデオを送っていただきました。「北極海へは砕氷船しか入ることが許されない。だから、なかなか北極は行けないのだが、たまたまロシアの砕氷船に乗せてもらって撮れたのです」という説明があったのですが、「なぜ砕氷船で行かなければいけないの？」と思うほど、氷はほとんどありませんでした。「何が原因か」明確にはわかりません。「長い目で見れば、地球は変わるもの」という意見もあるでしょう。しかし、そのことによって、北極のクマたちが困っている映像もあります。今私たち人間だけでなく、ほかの生き物たちも含めて、「生きている」を見詰め直さなくてはならないと思います。

それから、もう1つ、この言葉に込めた気持ちがあります。私が研究しているのは生命誌ですが、一般には生命科学研究があります。生命科学は、「生命とは何かを解こうとする学問」です。ところが、「生命」という言葉はとても抽象的で、10人いる中でだれかが生命と言ったときに、みんなが思う生命は同じかどうかよくわからない。例えば、「生命は大事」ということに反対する人は1人もいないでしょう。でも、「何をしたら生命尊重になるの？」ということになると、なかなか難しい。

例えば、殺さないというのは、生命尊重に違いありません。でも、私たちは何も殺さずには生きていけません。動物はほかの生き物たちの命をいただきながら暮らすようにできているので、絶対に殺してはいけないと言われたら、生きていけない。とはいえ、勝手に殺してはいけないことも確かです。では一体どうするの？という点になると、一人一人違ってきます。生命尊重というのは立派な言葉ですけど、それを言ったとたん、「何かいいことをやっている」と思って思考停止してしまいます。

ここにあげた二つの課題は、難しいけれど考えなければいけません。そこで、私がこのごろ自分でも心がけ、仲間たちに言っているのは、「動詞で考えよう」ということです。「生命」と言ってしまうと何だかわからない。けれど、「生きている」というのはどういうことなんだろうとまわりをみると、チョウ、アリ、私たち人間、植物と1つ1つみんな生きています。アリとバラでは

生き方が違います。それぞれを見て、違うところはどこだろう、同じところはどこだろう、と考えることができるわけです。「生命」と言わずに「生きている」と言うことで、いろいろ見えやすくなる。「動いているね」とか、「食べているね」とか、動詞で考えると、いろいろな生き方が見えてくるし、何が大事なのかというのが見えてきます。それですぐ答えが得られるわけではありませんが、動詞で考えるといろいろ見えてくるのです。

2 科学をコアに「生きている」ことについて考えてみる

生命については哲学の人も考える。文学の方もいろいろ考えていらっしゃるでしょう。私の場合は科学をコアにして考えますので、そこから入っていこうと思います。今、科学コミュニケーションの大切さがうたわれています。積極的に博物館などでボランティアをやろうという意識のある方には、今こういう問題がどうなっているかというところを考えていただきたいとお話をします。

新しい考え方をする場合、宇宙が参考になります。宇宙は、ついこの間までは、決まったもの、固定的なもの、定常宇宙という捉え方が主流でした。アインシュタインなどそう考えていました。その前は、神様がおつくりになったとっていたわけですから。

ところが、最近の宇宙論では、皆様御承知のように、無という状態、何もないという状態——何もないという状態というのは、今、私たちが知っているような空間とか時間とかいう概念がない状態ですが、そこから137億年前に宇宙は生まれたものであるとわかってきました。絶対に変わりがない——真実だという概念で物を見ていましたが、今は「何もなかったところから、私たちのいるこの大きな宇宙は生まれた」というわけです。生まれてからもさまざまに変化してきた。つまり、歴史があるということです。

私たちは、今、自然を考えるときに、決まったものとして見るのではなくて、生まれたものであり、いつも、まだこれからも、変わっていくものであると見るというのが、科学の中でほとんどの人が認めていることだと思います。

物質についても興味深い事がわかってきました。私たちは、「私たちの体はDNAや、たんぱく質でできている。それは炭素や水素などでできている」と語り、それらの物質がすべてだと思ってきました。ところが、この宇宙の中で私たちが知っている物質は、約4%だけだったと最近の宇宙論ではいうのです。あとの約4分の1、20%ぐらひはダークマター、暗黒物質と言われます。重さがあるから物質であることはわかるけれども、私たちが今知らないものです。あとの4分の3はダークエネルギーといって、重さもない。しかし、宇宙にそれが満ちていると思わざるを得ないというわけです。

申し上げたいことは、私たちは一生懸命研究をしてきた。その結果、私たちが知っていたことは自然のほんの一部だったということがわかってきたということです。こういう世界が見えてきたわけですから、これから先、もっともっと見なければいけないのです。わかればわかるほどわからないことが見えてきます。

ところで、古代インドの人の宇宙観があります。それによると、まず山や海がある私たちが暮らす世界があります。インドの人たちは——インドだけじゃなくて昔の人は、自分のいるところが支えられていないと、足元が危なっかしいような気がしたのでしょうか。インドですから「ゾウさんに支えてもらおう」と、私たちの暮らす世界を2匹のゾウさんがしっかり支えています。けれどもそれでも不安なのか、その下にカメさんがいるとっていた。さらに、その下はさらに

大きなヘビが支えているというイメージだったようです。

古代の人たちは、自分たちが暮らしているところは、毎日、目で見てわかっている。けれど、何かそれを支えているものがあると思っていた。私たちは科学で、私たちには見えないけれど、二酸化炭素があり、水素があるということを研究した。それは古代インド人の世界観のゾウに当たった。そして、彼らはもっと奥に知らないものがあると思っていた。カメはダークマターにあたります。つまり、私たちも知らないことがたくさんあり、そういう大きなもので支えられているのだという意識が大切なのではないかと思えます。古代のインドの宇宙観と現代最先端宇宙観とを比べてみたとき、これまでの科学は、全部知ること、追求していけば私たちはわかるのだという気持ちでやってきたけれど、もしかしたら、私たちが知れば知るほど、世界は複雑さを見せてくるのかもしれない。今、マルチバースとって、ほかの宇宙もあると言われているのですから、これを解いたから終わりということは恐らくないでしょう。私たちの宇宙はこうだったけれども、別の宇宙がある。その宇宙はどうなっているのだろうかという問いがあるのだと思うのです。

そのような宇宙の中でさまざまな星が生まれ、その中で太陽が生まれ、地球が生まれ、その地球の中に生き物が生まれたわけです。生まれて、生まれて、生まれて・・・私たちを取り巻くものは動いている。今、歴史の中にいる、動いている。137億年の時間の中で、46億年前に地球が生まれ、その上に38億年前に生き物が生まれた。その生まれたものが私の研究対象です。つまり、科学は、既に決まったものがあって、決まったものを知るのではないのです。

地球の上を考えてみましょう。現在は人間、バクテリア、キノコ、イモリと、いろいろな生き物たちがいます。5000万種ぐらいいると言われています。まだ名前が全部つけてあるわけでもないですけど。そういう生き物たちが、38億年前に地球の海で生まれた最初の生命体から進化して、現在のような状況になってきた。今ある私たちのこの地球も、またまた動いていく。

生き物についてもこの50年ほどで研究が進みました。

一例として、ヒトゲノムを見ましょう。A, T, G, Cという4種の塩基がずらっと並んでいるのがDNAですが、それがヒトの場合、32億並んでいることがわかっています。その32億がどう並んでいるかを知ることは、私たちの基本を知ることにつながりますから、世界じゅうの研究者がヒトゲノムを解析し、2003年には一応解析が終わりました。

DNAの仕事として一番大事なことは、たんぱく質をつくることです。皮膚のたんぱく質、消化酵素のようないろいろな酵素たんぱく質などがあって私たちは存在し動けるので、遺伝子としてDNAの一番大事な仕事はたんぱく質をつくることだと思って研究を進めてきました。ところが、DNAを全部解いてみたら、本当にたんぱく質をつくりなさいという命令を出している部分は、全体の1.5%にすぎないことがわかったのです。

宇宙では私たちが知っているものが4%だった。わかればわかるほど、今まで考えてもいなかったことが出てきて、新しいことを私たちは考えなければならない。しかも、80%は知っているけれど、あとの20%がわからないというのではなく、知っているところが4%だったり、1.5%だったりするところが、今、非常におもしろい。私たちは科学というものの考え方を少し変えていくときかなと思います。

DNAの場合、「1.5%をのぞくあとは何か」を解いていかなければなりません。ここではっきりしてきたことは、50%は、たんぱく質をつくることに直接かかわり合っていないということです。「昔の化石」と言うべきところや、エイズウイルスのようなものが昔感染した名残だろうと思われる「レトロウイルス型」のところ、単に繰り返し配列が並んでいるところなどがあります。か

つてこういうものが存在して、もしかしたら何かをやっていたかもしれないという部分がある。ある種の歴史の記録なのです。機械でしたら、こういうふう動きなさい、一番よく動くためにはこの部品とこの部品とこの部品があればいいですよとつくるのですが、私たち生きものは歴史の産物ですから、「効率よくやりましょう」というのではないのです。今私たちが持っている DNA のほぼ半分は、歴史の産物なのです。生命誌は、まさに、DNA のいろいろなところにどんな歴史が入っているのだろうと解いていきたいわけですが、これまでの科学の考え方ではわけのわからないところかもしれません。

ヒトでは余りにも複雑なので、ビール酵母という単細胞生物で、ゲノムがどうやって働き、たんぱく質をどのぐらいつくっているかを見た研究があります。酵母はタンパク質を約 6000 個つくります。それらがどうお互いにかかわり合っているのかということはとても複雑ですが、はっきりしていることは、1つとしてどれともつながっていないものはいません。独立で働いているものは1つもない。全部が相互に関係を持って動いていることがわかります。

いま申し上げた酵母のタンパク質間の相互作用を示した図を見ていておもしろいなと思うのは、「開いている」ということです。食物連鎖などは閉じて書かれてきました。しかし、生き物は開いているのです。実は、インターネットの図を書くと、世界じゅうの人々が電子的につながっている。私たちが社会の中でつながっている様子が酵母のタンパク質間の相互作用の図とよく似ています。こういうふうに、「広がって、みんながつながっている」状態を考えていくのが、生きているということを考える1つの切り口だと思います。

これまでの科学は、機械論的世界観を持ってきました。これはデカルト以来ですが、宇宙も機械として見よう、部品を全部調べ、構造と働きを全部調べ上げれば、私たちはすべてがわかる。生物についても、DNA やたんぱくなどを調べてきたのは、部品を全部調べて、その構造と働きを調べれば、私たちは生き物がわかると思ったからやってきた。ところが、最近のいろいろな新しい研究が示しているのは、でき上がったものを調べてもだめで、どうやって生まれて、どうやってでき上がってきたのか、お互いどんな関係があるのかということを見ない限り、それは解けないということです。総合的に全部の関係を見なければ、それは解けない。どうやってでき上がってきたかを見なくてはいけないということがわかってきました。それが生命誌 (Biohistory) なのです。

科学の大事な役割は、世界観を生むことです。最近はお金もうけにつながる科学技術を開発しないと科学と認めてもらえないという風潮があります。お金儲けにつながる科学もあっていいですが、科学の本当の役割は世界観をつくること、私たちは何者でどう生きていくのかということを考える役目を与えられているのが科学だと私は思っています。

これまでの機械論的世界観をつくってきたのも科学です。機械というのは利便性を求めます。社会の価値観も、利便性優先になりました。科学技術基本法をお読みになると、「私たちは利便性を求めます。科学は利便性を可能にするから大事なのです」と書いてありますので、いわば利便性を最大の価値としています。

生命論的世界観を持てば発想が変わってきます。生き物は何を一番大事にしているかといえば、続いていくことです。だから、38億年続いてきた。多分これからもこのシステムは続いていくでしょう。私たち人間がいい加減なことをやって滅びたとしても、生き物は滅びない。私たちは時々、地球に優しくとか偉そうなことを言いますが、これはとんでもないことで、地球は、「あなたに別に優しくしてもらわなくてもいいですよ」と言うのではないのでしょうか。「あなたは要りません

よ」と言われるかもしれません。

私たちは、地球環境問題が気になります。どうでもいいと思っている方はいないと思います。なぜでしょう。私などそろそろ「自分の人生は……」と思いますけれど、でも、子どもや孫のことを考えたり、自分の家族のことだけでなく、これから暮らしていく人たちのことを考えたり、それから、ほかの生き物たちのことを考えたりしたときに、やっぱり続いて行ってほしい。「これで終わりだよ」というのはつらいと感じるからではないでしょうか。今、研究が進み、生命論的世界観を持ちましょうという方向に動き、「便利さ」よりは「続いていく」という方を大事にする考え方を育てるようになってよと思っています。

機械は、均一で効率的なものがよいのですが、生き物の場合は、できるだけ多様で、結果よりもプロセスが大事です。私たちはどうやって生きるかということが大事なのです。行きつくところではなく、毎日毎日どうやって生きるかというプロセスが大事なのです。そういう時代になるのではないかと思います。

こうして、生きているということを見ると、つながっているということが見えてきます。「つながっている」の意味は、時間的なつながりと、空間的なつながりの両方です。137億年前からずっとつながっている。それから、さっきの酵母のお話でも申し上げたように、どんな小さな世界でもいろいろなものがつながっている。人間の社会もみんながつながっている。「つながっている」、しかも「変わりながら」。固定じゃないんですね。機械は固定です。でも、生き物はいつも変わっている。1人の人間だって、きのうときょうでは違う。新しい種がどんどん生まれてくる。いつも変わっている。変わっているけれど、何の関係もないものは決して生まれません。全部つながっている。変わって今までと違うものができるけれど、今までと無関係なものは決して生まれません。「変わりながらつながっている」というのが、生き物を見るときに一番大事なことです。具体的には、まずは歴史です。生物で言えば進化。それから、生態系としてみんながつながっている。それから、個体だったら、一生ずっと変わりながらつながっていく。そういうことだと思います。

3 生命誌研究館について

きょうは科学博物館や歴史博物館や美術館など、社会とつながっているところで働いていらっしゃる方たちがいらしていますので、今までお話したような状況を踏まえ、今、わたしが何をやらなければならないと思っているか、私が今仕事をしている生命誌研究館をなぜつくったかお話ししたいと思います。

「生命誌研究館」は、私の思いから生まれました。英語で、生命誌は「バイオヒストリー」です。先ほどから申し上げているように、生きものはヒストリーで考えなければいけない、でき上がっているものを分析するだけではわからないと思います、バイオヒストリーとしました。研究館は「リサーチホール」です。このホールに思いを込めていますので、少し聞いていただきたいと思っています。

2つの活動をしています。1つは、「生きているということを見詰める」という作業です。具体的には研究です。全部で40人ぐらいしかいない小さな場所ですけれども、5つほどのラボがあって、そこで、進化、発生、生態系を連携させて、生き物たちが持っている大事な側面を研究しています。具体的には、チョウ、クモ、カエルなど身近な生きものを対象としています。「リサーチホール」ですので、コンサートホールと同じように、だれでもがいらっしやれるようになっています。そうすると、余り大型のものとか、非常に平易な言葉を使えば、血の出るようなものは扱

う場所ではありません。だれでもが楽しめるように、クモやチョウ、カエルなどそういうたぐいのものを扱っています。

研究の成果は普通、論文に書いて終わりです。けれども、研究はこれで終わらないと思い、研究館をつくりました。

コンサートホールを思い浮かべてください。音楽を演奏するホールです。例えば、ベートーベンの第九交響曲の楽譜が置いてあっても、私がそれを見ても音は鳴りません。ベートーベンが素晴らしい作曲家であっても、楽譜を積み上げて亡くなってしまったら、私たちはベートーベンを知らないでしょう。音楽は演奏されるから、素人でも「ああ、素晴らしい」と思える。コンサートホールは、一流の演奏家が一流の演奏をする場所です。けれども、素人が来てはいけないなどとはいいません。「あなたは音楽はわからないでしょう。あなたに聞かせてもしょうがない」などとはいいませんね。「どうぞいらしてください」といいます。一流の演奏家が一流の楽譜を思いっきり演奏して、それをみんなが楽しむところです。

音楽の専門家は楽譜をお読みになればわかるはずですが、私にはわかりません。論文はいわば楽譜です。限られたその分野の専門家ならわかるけれど、普通の人にはわかりませんし、同じ研究者でもちょっと分野が違ったらもうわからない。だとしたら、科学も演奏しなければいけないというのが私の考えです。演奏しなければ科学は社会には存在し得ません。ないも同然です。ベートーベンの楽譜が演奏されなかったら、恐らくないも同然であると同じように。そこで、研究館は、自分たちが論文を書くだけで終わらず、必ずそれを美しく、またはだれでも楽しめるように表現しようという考え方で作った場です。

ただ、音楽は演奏の仕方の研究がありますが、科学についてはだれも表現の研究をしていません。だから、どうやって表現したらいいかだれも教えてくださらないので、自分でやるしかない。仕方がないから、研究館では、「まだ下手かもしれないけれど、とにかく表現ということをしていろいろやってみて、だめだったりみんなからいろいろ文句を言われたら直していけばいい」として表現を研究しております。表現の方法は機関誌、展示、ホームページ、ミュージカルなどさまざまです。

生命科学は宇宙ともつながっています。物理、情報、哲学など、いろいろな学問とつながっていますので、こういう表現の活動をすることによってほかの分野の方たちもわかってくださり、ほかの学問とつながって、研究者の世界で新しい科学がつかれるのではないかと考えています。さらに、社会との関係で言えば、研究を表現することによって、研究を社会の中にどんどん出していきたい。

具体的な例を挙げると、教育、医療などつながりはじめています。機械論的世界観に基づく医療は、「ここはだめですね。取りかえましょう」ということになりませんが、生命論的にいえば、あなたの一生を健康で暮らせるように見ましようという発想になります。先日『「生きている」を見つめる医療』という本を出しました。発端は、近くにある大阪医大の先生から「このごろの医学部の学生は生物学を全然勉強しないで入学して来ます」と伺ったことです。その大学では、開業医を育成するのですが、その人達が、生き物のことを全然知らないで、技術を学んだり骨の名前などを覚えたりして試験に受かって、「お医者様としてはどうかと思うのです」と先生がおっしゃって、「生命誌について学生たちに講義してくれませんか」と依頼され、4年ぐらい前から始めました。生命誌研究館の若い人たちと一緒に始めてみましたら、日本には医学教育の中に、「生きている」ということを教える教科書が1冊もないということに気がつきました。それでは

学生さんたちもどうやって勉強していいかなかなかわからないので、私家版の教科書をつくりました。これが『「生きている」を見つめる医療』という教科書です。それを講談社が「本にしましょうよ」と言ってくださったので、去年、現代新書になりました。

芸術面では「いのち愛づる姫」という朗読ミュージカルをつくりまして、3回ぐらいやりました。なかなか楽しんでいただきました。

また、小学校6年生の教科書に「生き物はつながりの中に」という文章を書きました。国語の教科書です。そこには、進化や発生、生態系の話が入っています。実はこれは理科で教えようと思うと、学習指導要領があって、中学校でも教えられません。ところがおもしろいことに、国語でだったら小学校で話せます。これまで私がお話ししてきたようなことを、生きているワンちゃんとロボットのワンちゃんを比べて、「こっちは機械で、こっちは生き物ですが・・・」というようなことから進化も発生も書けるのです。

これを読んだ小学校6年生から毎年たくさんのお手紙が来ます。今年は多分800通ぐらい、返事を書きました。クラスでまとめて40通とか20通とか来るので、量が多くなるんです。子供たちは進化や発生、生態系などの言葉は使っていませんけれど、その根本の考え方はよくわかっている。時には、6年生から、「僕はずっと生きているということの意味を考え続けています。でも、いまだに答えが得られません。先生はどうですか」みたいな手紙が来て、「私もわかりません」と書くしかなかったこともあります。そういうのも含めたお手紙が子供たちから来ます。

次に、生命誌研究館での「生きている」を見詰める活動と表現の例をご紹介します。

熱帯雨林についての研究をご紹介します。日本の南西諸島と中国の雲南を対象としています。熱帯雨林は、今、地球環境問題を考えたら、非常に意味のある場所、だけど沢山問題を抱えている場所です。

余談ですが、このごろバイオエタノールがもてはやされ始め、ブラジルではサトウキビをつくるために熱帯雨林が切られています。とんでもないことが起きているわけです。砂糖からアルコールをつくるなんて、新技術でも何でもない。砂糖を絞った後の残りからアルコールをつくりましょうというならともかく、砂糖からアルコールをつかって車を走らせましょうというのはないでしょうと思うのですが、そういうことが沢山起きていて、熱帯雨林は危機的状況です。また、先日、釧路湿原の方とお話をする機会がありました。釧路湿原は国立公園として法律で守られています。湿原を守ろうと思ったら、もとの原生林を守らなければいけません。ところが、日本では、何十年前に原生林を切ってカラマツを植えるという方針を出したのだそうです。「なぜですか」とその方に聞いたら、「仕事をつくるためです。木を切って、木を植えるという仕事をつくるためです」ということでした。原生林とカラマツ林では湿原にとっての意味は全く違います。原生林を切ってしまったら、湿原は壊れます。「それでは、そのカラマツ林は何か経済的意味があるのですか？」と言ったら、別に意味があるわけでも何でもない。「切って植える」という作業をつくるためだけなのです。かつてはしかたがないとしても、今もそれが止められないというので、本当に驚きました。そういうことは、みんな頭ではわかっています。熱帯雨林がどれだけ大事かも、わかっている。それなのにサトウキビのためにまた切ってしまう。私はそういう場面に行き会うたびに、それは違うでしょうと一生懸命発言していますが、それで世の中が動くかという、なかなか動きません。これはちょっとつらいことです。

話を元に戻しますと、熱帯雨林の中には野性のイチジクがたくさんあります。イチジクは熱帯雨林の中ではキープラント、鍵植物と言われています。なぜ鍵か。常時実がなっているの、鳥

や、虫や、小さな動物たちがこれを食べて生きているからです。森というのは木だけではなく、ほかの動物たちがいて初めて森です。その動物たちを支えているのが主としてこのイチジクの実なのです。それから、もう1つは、そうやって動物が食べてくれますから、その種があちこちに落ちます。すると、熱帯雨林を切ってしまったたり、または火事で焼けてしまったとき、もう一度森が再生するときの最初に生えてくる木がイチジクなのです。そういう意味でキープラントなのです。

イチジクの実を割りますと、ハチがいます。1.5 ミリから2ミリぐらいのハチです。これはイチジクコバチと呼びます。このコバチはイチジクの穴から中に入っていきます。中で自分の卵を産むためです。中で幼虫はさなぎになり、成虫になります。雄と雌はこの中で交尾をして、雄はこのイチジクから雌が出ていけるように穴をあけてやります。雄はここで命が果てます。雄バチにとっては、ここだけが世界です。あけてもらった穴を通して雌は花粉を抱えて次へ飛んでいきます。

このハチについて中国、日本、メキシコなどいろんなところで調べていますが、日本の例を挙げますと、ガジュマルとか、アコウ、イヌビワなどがイチジクの仲間です。必ずハチが入っていて、花粉を運んでくれています。それが、おもしろいことに、イチジクとコバチの関係は1対1なんです。ガジュマルに入るハチは決まっている。アコウのハチが入るということはありません。

イチジクについてDNAを使った家系調べをすると、ガジュマルとアコウはとても近い。イヌビワは1つの仲間です。こうやってまとめていきますと、2億年ぐらい前には1種類だったのが分かれてきたということがわかります。それから、ハチの方も、まさに同じときに1つだったものが、全く同じように分かれてきているのです。ということは、今お互いに共生しているのですが、この共生は今日始まったことではなくて、少なくとも2億年前から共進化ということをしてきているということです。お互い一緒に進化をしてきて、ずっと長い歴史をともしました。これがあったからこそ、今の熱帯雨林の中でのイチジクの繁栄がある。

大げさな言い方をすれば、私たちのこの地球の酸素をつくってくれる大事な場所である熱帯雨林を支えているのは、この1.5 ミリか2ミリの小さなハチだと言ってもいいかもしれない。そういう姿が見えてきます。「生きている」を見詰める研究の1つの例はこういうものです。

「表現」の例についてご紹介したいと思います。生命誌研究館で作成したDNAが複製を作る様子を再現したCGをご覧ください（CGの再生）。

DNAの二重らせんについては、皆さん御存じだと思います。二重らせんが2つに分かれて、新しく次をつくっていくということは、とてもよく知られています。DNAが実際にどうやって複製をつくっていくかということについての研究論文は山ほどあります。その研究論文を全部読んで、そしてそこからそのデータを全部集めて、一体それが本当に動いたらどうなるだろうということをCGで再現してみようと試みました。結論から言うと、そうして調べたすべての研究、それからDNAの教科書に書いてあるDNAの構造が間違っていることがわかりました。というのも、そのやり方では複製を作る様子がうまくCGで動かないのです。どうやって動かそうと思っても動かない。すると、DNAの複製を研究している方が、昔ドイツのある研究者が書いた論文について教えてくださって、それに合わせてつくったら、ご覧頂いたように見事にCGが動きました。

何を申し上げたいかというと、これは表現を行ったのですが、表現をすることによって、新しい科学的な発見があったということです。きちんと表現ができるようなものでないと正しくない

のです。ですから、表現は、単にお遊びではない、非常に大事なことだというのがわかりました。

4 生命誌的世界観について

私たちは社会の中に住んでいます。歴史があり、私たちの人生があり、社会がある。この中で「人間」としての私があります。しかし、一方でさっきから生態系、進化、発生ということも考えなければいけないと言ってきました。「生きている」を見詰めるということは、「ヒト」という生き物としての私を見ることです。私たちが生まれて育っていくのと同じように、カエルも生まれ育ち、チョウも生まれ育ち、また、私たちに歴史があるのと同じように、38億年前からずっと進化という歴史があり、ここでおサルさんが生まれ、ヒトになり、ヒトは歴史をつくり、つながっているわけです。「生きている」を見詰めるとは、「ヒト」としての私と「人間」としての私というのが、私の中に両方ある、それを考える事だと思います。これが「生命誌的世界観」です。

例えば、グリーンピースというようなエコロジーの主張をなさる方たちは、「ヒト」としてのつながりばかり主張なさる。それから、先ほどの原生林を切ってしまうような方たちは、「人間」の側面だけが社会だと思っている。けれど、私たちは両方持っているのです。私たち一人一人が、私として「人間」であり、「ヒト」であるという意識を持って、普段は「人間」のつながりで暮らしているのですが、いつも「ヒト」としてのつながりを意識するようになる必要があるのです。

今まで話したことの一番根本に置きたい動詞が、「愛づる」なのです。「愛づる」は、「虫愛づる姫君」という、11世紀、「源氏物語」と同じころに書かれたお話からとっています。大納言のお姫様が主人公です。このお姫様は、男の子たちに虫をいっぱい集めてこさせて、小さな箱に入れて飼っている。「おやめなさい。困ったものだ。お嫁にも行けない」とみんなが言うのですが、このお姫様が、「みんな、これは汚いと言うけれども、この毛虫は、ずっと見ていたらきれいなチョウになる。チョウになったら、みんな、きれい、きれいと言う。でも、そうなったら、あれはもうそんなに長い間、生きてはいかない。はかないものです。本当に生きる姿というのはこっちの虫の方にあると私は思いますよ」と、みんなにそう言うのです。

昔、女の子はまゆをそらなければいけなかったけれど、この女の子は「まゆなんかそりたくない」と言って、げじげじのまゆげだとか書いてあります、お歯黒もしなければいけないのだけれど、それもしたくないという。真っ白い歯で笑っておかしいと書いてあります。それから、観察しようと思うものですから、長い髪は邪魔なので、耳かけすると書いてあるんです。それも当時はいけないことです。このお姫様は確信犯ですね。今でいったらナチュラルリストです。これはフェアブルよりも前ですし、西洋でこういうことが出てくるのは17世紀ぐらいです。11世紀にこういう方がいらした日本は、すばらしいと思います。特に女の子というところがいい。

私は、いつもこの子と一緒に物を考えていこうと思っています。私たちが生きる、考える、いろんなことをする一番の基本にあるのは、「愛づる」ではないか。「愛づる」というのはラブではなく、フィロソフィーのフィロと同じです。フィロソフィーは哲学といますが、本当は愛・知です。知を愛する。そのフィロですから、かなり知的な愛です。これは、人間にしか持てない愛だと思い、あらゆることの基本はここに置きたいというのが、私の気持ちです。医療に携わるのでも、道具をつくるのでも、機械を発明するのでも、「愛づる」という感覚が基本にあれば、余り外れたことをやらないで済むだろうと思いながら、生命誌研究館では、「愛づる」という気持ちを一番基本に置くというお約束にしています。

社会全体でも「愛づる」が大事だと思っています。

5. テーマ別分科会

テーマ別に①「これからの博物館運営とボランティア活動」（職員対象）、②「体験学習とボランティア～ボランティアの企画力を生かす～」、③「ボランティアによる展示解説」、④「地域との連携」の4つのグループに分かれて、発表と発表に関する討議が行われた。以下に各分科会の概要を事例報告の内容を中心に示す。

第1分科会「これからの博物館運営とボランティア活動」 (職員対象)

助言者：国立科学博物館展示・学習部学習課長	小川 義和
事例報告者：九州国立博物館交流課ボランティア室長	糸井 茂
司会：国立科学博物館展示・学習部学習課 ボランティア活動・人材育成推進室長	亀井 修

事例報告 九州国立博物館

1 九州国立博物館とボランティア

九州国立博物館は、平成17年10月にオープンし、オープンと同時にボランティアを導入しました。今年で3年目です。任期制をとっており、来年度からは新しい第2期ボランティアの活動が始まります。

2 第1期ボランティアの募集と登録まで

第1期ボランティアを募集したところ、東京、京都、広島、山口、沖縄・鹿児島・宮崎を除く九州各県から842名の方の申し込みがありました。歴史系の博物館ですので、若い方の応募は少ないのではと思っていたのですが、20代も151名いまして、いろいろな世代の方が応募されました。地域の方、市民の皆様が、博物館ができるのを待っていたのではないのでしょうか。熱意が伝わってきました。

館としては、生涯学習を博物館でしていただき、学習していただいたことを今度は来館者に返していただきたいというスタンスをとっています。その「生涯学習」の中の視点に世代間交流という視点も含まれます。若い方は年配の方の、年配の方は若い方のよさを活動する中で知っていただきたい、それも生涯学習ではないかということです。第1期ボランティアに関しまして20代から151人の応募があり、これは842に対して18%ですので、定員250人を採る予定でしたので、18%をかけ、年代別に予定数を決めました。このようにして20代は45人、あとは年代ごとに決めていきました。いわば年代ごとに募集をさせていただいたということになります。

実際に採った人数ですけど、展示解説が56、教育普及が70、館内案内は日本語、英語、韓国

語、中国語、4つの部会に分かれまして82名、環境が28、イベントが14、合わせて250名のボランティアさんの採用をしました。ところが、説明会を1週間ほどやったとき、「活動は週に1回、半日程度」というルールにたいし学生さんから非常に異論がありました。この活動回数は、全国の博物館を回らせていただいたときに、週に1回、半日程度だったら無理なくできるということを教えていただいたことに基づいています。ところが、学生さんは非常に忙しくて来られないということになり、この250以外に学生枠の43を設けて、293人でスタートしました。

3 活動の内容

まず、展示解説のボランティアです。4階の展示室を説明しながら御案内しているボランティアです。彼らは「話す極楽、聞く地獄」、こういうことを合い言葉にしています。話す方は楽だけど、聞く側は苦しいのではないかということです。それで、言葉のキャッチボールということを非常に工夫しています。彼らは研修を受けていますので、1時間でも2時間でも話せますが、来られた方に一方通行で説明するのではなくて、来館者の方にも言葉をもらう。それに対してまた返すという形の言葉のキャッチボールをしながら説明をするというのを非常に大切にしています。リピーターが多いセクションです。

それから、1階のところにあります「あじっば」（アジアの原っぱを略して「あじっば」といっています）のボランティアを教育普及ボランティアと言っています。最大派閥で、70名がここで活動をしているところです。一番楽しい活動場所ではないかと私は思っています。

次に、日本語、英語、韓国語、中国語のボランティアですけど、館内の概要説明をしています。窓越しに修復施設または収蔵庫を窓越しに見られる場所の御案内もしています。彼らが大切にしているのは、これは全日空の方から教えていただいたんですけど、アイコンタクトをとるということです。常にお客様の目を見ながら説明をしています。お客様が必要そうではなかったら、退屈そうな顔をされたり、興味を示されないときには飛ばします。逆に、お客様の方が、非常に目の輝きがよかったり、うなずかれていたらそこを膨らませる。そういうテクニックを使いながら、お客様のニーズに合った説明を一生懸命やっています。ここもお客様のリピーターもボランティアのリピーターも多いところです。

それから、九州国立博物館ではIPMという考え方を採用しており、簡単に言えば、化学物質を使わずに人海戦術で害虫を防ぐという考え方ですけど、そういう裏方の活動をやっているのが環境ボランティアです。収蔵庫の掃除、さらに、集めてきたカビやごみを細分化して、どんなのがあるかというデータ化までも彼らがやっています。地味な活動ですけど、非常に活動率が高い。

次が、イベントボランティアです。館でも、年間、200回近くのイベントをやっています。それとは別に、イベントボランティアは企画立案、運営、実施、反省までやります。大庭照子さんという方に来ていただいた「昭和からの贈り物」というイベントの時は、ポスターもボランティアが作りしました。予算は、館が認めれば出すという形をとっており、運営、企画からすべて彼らがやっています。そのほかにイベントボランティアはボランティア対象に、歴史探訪ツアーという形でよその博物館を学習するというような企画もやっています。

4 九州国立博物館のボランティアの定義について

当館のボランティアの定義について御説明をさせていただきます。

「博物館とボランティアはパートナーである」ということを鮮明に打ち出しています。ボラン

ティアは知識や技能、持っているよさ——英語ができたり、解説がうまかったり、非常に環境に詳しくあったり、そういった知能や知識、技能を博物館に提供してくださいとお願いしています。あるとき、そういう説明を最初にしたら、「私は何もありません」と言われた方がいましたが、笑顔もすてきな財産ですとお話ししました。持っているよさを出していただきたいということなのです。それに対して、博物館は研修を確実にやります。初年度はトータルで 250 回ほど実施しました。それを今度は来館者に返してくださいとお願いしています。来館者に説明する、または、裏方でいろいろな活動をするを「返す」と呼んでいます。そうすることで初めてボランティアの自己実現ができますと伝えています。「パートナー」という姿勢を鮮明に打ち出しています。

それから、2つ目には、「無償の労働力ではない」ということをはっきりと打ち出しています。ボランティアは 10 の部会に分かれて活動していますが、当館のいろいろな課が、ボランティアを使いたいと単発的に依頼してきます。例えば、草が生えているから草を切してほしいとか、今度、シンポジウムをやるから受付をやるとか。そのときに、「パートナーで、無償の労働力ではない」と言っていますので、1回1回、ボランティアに聞きます。例えば、今度、よその課がシンポジウムをやるが、職員ではちょっと人数が足りないからボランティアの人に受付を手伝って欲しいと言ってきた場合ですと、「11月19日、20日に人数は10人要ります」という提示をします。そのお知らせにボランティアの人が名前を書いたら、ボランティア活動が成立するという形にしています。だから、だれも手が挙がらないという可能性もあります。単発的な活動については、そういった形をとっているところです。これは定型の活動以外の部分ですね。

5 ボランティア活動の進め方

開館前で何もないゼロからのスタートでしたので、こんな活動をされたらどうですかと館側が先に提案をしました。それに対してボランティアから意見をいただき、再度、関係各課と調整しながら、また軌道修正案をボランティアに出すというシステムをとっています。

具体的に言いますと、4階の展示室は、最初はインフォメーション方式という提案を館はいたしました。「非常にお客さんがたくさん入られて忙しいから、展示解説の皆さんは、とにかくインフォメーションの役目をしてください。聞かれたことだけお答えする。展示物の説明はしないでください。トイレはどこですかとか、金印はどこに行ったら見られますかとか、そういう質問にだけ答えてください」という提案をしました。これに対して、ボランティアの方から、「これではやりがいがない。展示物を説明したい」という提案がありましたので、学芸サイドと協議をした結果、きちんとした研修を受けてもらえば可能ということになりました。そして今は展示室の中を、時代の古い順番に案内しています。このようにボランティアはパートナーですので、考えも生かしながら進めていくという形をとっています。

昨年度、「ボランティアメッセ」というボランティアの全国大会を当館でやったときに、ボランティアの人たちが劇を企画立案してやりました。こうした企画立案もする。そこにやりがいや自己表現ができるのではないかと考えています。

それから、「パートナー」という言葉がスローガンだけで終わらないように、定例会という話し合いの場を設けています。10の部会がありますので、まず部会ごとに話しあっていただきます。個人の意見はすべてここで出してくださいとボランティアの皆さんにはお願いしています。部会でかなりいろんな意見が出てきますが、事務局が聞いておかしいなと思うようなことはここで皆さんから、「それはおかしい」と指摘され、自然淘汰されます。それで部会からは、しっかりとし

た考えの意見しか上がってきません。部会でまとめてもらうというシステムには、事務局も非常に助かっています。

定例会には、1つの部会から2人ずつ、今20人のボランティアがいますが、館側は代表で私だけです。1対20で話し合いをします。今はこれがうまく機能して博物館の運営にも役立っていますが、本音を言わせていただきますと、開館前は全部不満ばかりで非常に苦しかったです。今はうまく回っていて、彼らの思いと館の思いがうまく回っていると思います。

6 任期について

3年任期を最初に採用しました。800名の方が応募されて、290採りましたので、残りは500いらっしゃるわけです。博物館としては全員にやっていただきたい。そのためには任期制で一応退いていただくという形をとりました。けれども、「パートナー」ですので、ボランティアの人たち200名に来ていただき、職員達と、任期制について話し合いをしました。彼らは、今まで3年間勉強したこと、経験したことを次の第2期ボランティアに伝えたいと主張しました。それから、もう一つ、「全員残したらいけない」とボランティアさん達から言われました。「活動は週に1回、半日程度」となっているのだから、あまり来ない方や、研修だけ来る方は外してほしいと言われました。それで、ある一定期間を決めまして、72時間という数字をさだめて、それを満たした方が第2期ボランティアとして残る資格を得るということにきまり、非常にスムーズにいきました。私たちが「切る」とは言っていません。彼らから、そういった形で切ってくださいと言われたのです。それで152名の方が最終的には残られることになっています。

ただ、任期制は残したいという館の思いがありましたので、第1期ボランティア、つまり3年間終わった方は、1年更新で最大3年までとしました。だから、わかりやすく言えば、6年任期制という形になっています。6年で終わりという形になりました。それから、第2期ボランティアさんの方も、3年間、活動した後は、こういった形で1年更新ごとで最大6年間、博物館で活動ができるという形をとっています。

それで、募集人数が、今回、249名の募集をしました。前回と同じ形ですけど。238名の応募がありましたので、全員合格、登録ということで、合わせて238足す152ですけど、来年度は390で進めていく予定です。

7 今後の課題

(1) 活動率について

各部会ごとの活動率を見たところ、「教育普及」の活動率が落ち込んでいます。58%です。50%になると、土曜・日曜はボランティアさんがいないという事態がおこります。この冬はお正月から開館しますが、お正月もボランティアはだれも来ない。だから、業者にお願いしました。教育普及の活動は楽しいと思います。私ももしボランティアをするのであれば教育普及に入りたい。教育普及担当の職員は6名おり、研修も充実している。スタッフも充実しています。なのにボランティアの活動率は58%と低い。

その原因を私なりに考えたのですが、1つは、ボランティアが分断しているのではないかと思います。よその部会は、例えば、病気で1カ月ぐらい来られなくなって、ちょっと来ると、「よく来たね」とみんなが声をかけるのです。するとそのボランティアは、「来てよかった。また行こう」と思うわけです。教育普及のボランティアさんに聞いたら、同じ部会のボランティアと

一言も話さずに帰ることが多いと言うのです。「あじっば」という活動場所において、そのエリアからはなれられず、会話しづらい。「では、終わった後はどうなのですか」と聞いたら、「すぐ帰ります」ということで、なかなかコミュニケーションがとれないようです。ボランティア活動というのは、もちろん活動そのものも楽しいのだけど、いろんな方が来られているので、その方と話すことによっていろんな勉強ができます。それも1つの楽しみだと思えます。

それから、もう1つは、ボランティアに対する考え方の相違が原因になっているのではないかと思います。事務局の考え方は、なかなか教育普及の職員まで徹底しておりていない。それは事務局側にも責任はあると思っています。ボランティアをこまとして使うんじゃないで、ボランティアが自己表現できる場を設定しなくてはいけないという点が、事務局が説明不足で、教育普及の職員と共通認識になっていなかった。このごろ話し合いを重ねて理解していただいたと思いますので、来年度は心機一転し進んでいければと思います。

(2) マネジメントについて

2つ目の課題です。私は肩書がボランティア室長ですが、職員は1人です。私の下に非常勤職員がいて、1日交代で来ますので、事実上2人で担当しています。例えば、研修会を1月から3月に19コマやります。400人入る講堂で、19コマ。対応が、研修1つとっても非常に厳しく、2人では390人の対応ができないというのが現実なのですが、それでも390人を受け入れてしまった。

その対策として、来年度からサポート部を新設しますが、そのサポート部の方に少し事務局の活動のお手伝いをしていただけないかと思っています。この新設サポート部がボランティア説明会用につくられた資料を見ると、ボランティアの人が考えているサポート部の活動内容がわかります。彼らは、「広報活動を通してコミュニケーションの場をつくる」ことを考えています。体制については、交流課と登録ボランティアで構成する。サポート部は新規募集が26ありましたので、第1期ボランティア4名と合わせて30名で来年度発足します。彼らは広報誌を発信したいと言っています。それから、ボランティアの研修などのいろいろな活動のデータをパソコンに入れていつでもオープンにしたいと言っています。また、よその博物館との連携や交流会、研修会を持って、コミュニケーションの場をつくり、それも情報発信したいと言っています。

事務局は、ちょっと言葉が適切じゃないかもしれませんが、ボランティアマネジャーの育成をしたいと考えています。ボランティアをマネジメントする人たちをつくりたいと考えています。これを、今後、館の方からサポート部に提案します。

1つは、ボランティア室の運営を彼らにお願いしたいと考えています。ボランティア室の中にボランティアステーションをつくりたい。今が大体1日延べ人数で30から40、新規ボランティアさんが入りますので4月からは1日50から60が延べ人数で来られるわけです。そうすると、対応が事務局だけではとても対応ができないので、ボランティアステーションをつくり、新ボランティアさんの対応をしていただけないかと今度提案する予定です。それから、先ほど言いました研修会の運営もお願いしたいと思っています。企画立案は事務局が責任を持ってやっていますが、運営の方をお願いできればと。研修も含めまして、ボランティア全体のお世話をこのサポート部の方にお願いしたいと考えているところです。

そのための研修は今後やっていきたいと思っています。博物館のことは、仕組みから中身からすべてを知っていただく研修をやっていくことを考えています。このような提案を、今後3月までにやって、4月から進めていきたいと考えているところです。

8 質問を受けての補足説明等

Q. マネージメントボランティアと職員（有償ボランティアコーディネータースタッフ）との線引きについてどうか教えているか？

A. 個人情報にかかわる部分は有償ボランティアコーディネーターが引き続き担当する。また、館の運営上「休んでは困る」という部分は引き続き有償スタッフが担当するというので線引きを考えています。

ボランティアコーディネーターの職員の基本的な仕事は、ボランティアと職員、ボランティアと学芸員、ボランティアと館をつなぐところです。ボランティアの思い、こんな研修を受けたいとか、館に対してこんな形で実現したいとか、それをつなぐのがコーディネーターの仕事ですが、それは今できてない。雑務ばかりやっています。1日30名から40名来ると、いろんな形で個人個人が事務局に来ます。IDカードをなくしたとか、駐車券をなくしたとか、今度、研修会はどんなふうになっているのとか、その対応で追われている。ボランティアの受付業務も事務局でやっていますので、ファクス・電話が、ひっきりなしに来ます。その処理もある。基本的には、今、雑務をやっていて、本来のボランティアコーディネーターの仕事はやれてないと思っています。

だから、ボランティアステーションという形でボランティア室にボランティアさんがいて、基本的なインフォメーションはボランティアができるようになれば、少しその問題が削減されるのではと期待しています。さらにはパソコンの管理や、入退室のIDカードの管理も彼らに、今から交渉して、やっていただこうと考えています。

Q. 研修をたくさん実施しているが、参加者が次第に減るといったことはないか。

A. 言われるとおりです。1年目はほとんど来られます。2年目は少し、3年目はだんだん少なくなってきました。しかし逆に、問題は聞きたくても来られない人だと思えます。100%の参加は無理なのです。それで、研修は講師の先生の了解を得てビデオに撮って、それをDVDに焼きつけ、いつでもボランティア室で見られるようにしています。基本的には、座学に参加しないときにはボランティア室にあるDVDを必ず見てくださいと行っています。結構一生懸命見ていると思います。そういった形での研修の保証をやっていますので、当日、参加は少なくとも、「DVDで見たよ」というボランティアさんは結構たくさんいらっしゃいます。

余談ですが、細く長く続いているのは、ボランティアが企画する研修です。例えば、韓国語や中国語の講座を毎週やっています。また、例えば、刀剣に詳しい方が研修の自主企画を持ってきて、実施するとたくさん集まります。当館には手話の会というのが連携グループという形で入ってもらっていますが、手話の学習会もボランティアさん独自の研修としてあります。このような研修の方が細く長く続いています。

記録係：国立科学博物館教育ボランティア 歌門 妙子

会場係：国立科学博物館教育ボランティア 小森 喜雄

川鍋 和代

第2分科会「体験学習とボランティア ～ボランティアの企画力を生かす～」

助言者：国立教育政策研究所 社会教育実践研究センター長 馬場 祐次朗
 事例報告者：北九州市環境学習サポーター 上永 陽一
 司 会：国立科学博物館教育ボランティア 五十嵐 邦享

事例報告：北九州市環境ミュージアムと環境学習サポーター

北九州市環境ミュージアムと環境学習サポーターの活動についての発表を行います。

まずは、北九州市の紹介になります。北九州市は、1901年に官営八幡製鐵所が出来てから、工業都市として発展してきました。しかしながら、発展すると共に、様々な公害問題が深刻化しており、空には“七色の煙”が工場から排出され、洞海湾は魚も住めない“死の海”と呼ばれるようになりました。

そのような中、工場近くに住む婦人の方々が病気がちな子ども達のため、北九州市に青空を取り戻すために立ち上がりました。大学の先生の指導を受け、公害を科学的に分析したり、『青空がほしい』という映画を製作したり、様々な活動を行い、行政や企業へと訴えていきました。

こうした婦人たちの活動を受け、市民・企業・行政が三者一体となって、多くの公害対策を講じ、きれいな空と美しい海を取り戻したのです（スライド1, 2）。



スライド1

スライド2

北九州市は、このように公害を克服した歴史を持ち、そこで培われた技術なり人材を海外に派遣するなど、国際協力にも力を入れております。また、循環型社会を目指してエコタウン事業を実施しております。そして、北九州市の環境教育の拠点の施設として環境ミュージアムを平成14年4月に設立しました。

環境ミュージアムそのものの特徴は、環境に配慮した建物だということです。日本ではじめての壁面緑化も行いました。それから廃ガラスで透水性の高い舗装もしております。その他にも様々なものがあります（スライド3）。

館内では、公害を克服した歴史についての紹介や「新しい技術とエコライフ」をテーマに、未来に向けた環境への取組みについて学習できるシステムになっております（スライド 4, 5）。

館内展示物を解説するインタープリターは展示や会話をひとつのきっかけとして、環境に対する気付き、考え、行動するきっかけづくりを行っています。インタープリターは、修学旅行などの団体の見学も引き受け、学校の要望を聞きながら、それにマッチしたプログラムをたてて、フォローも行います（スライド 6）。



環境学習サポーターについてですが、環境学習サポーターはさまざまな環境問題を楽しく面白く、体験的に学ぶ環境学習のお手伝いをする市民ボランティアです。環境学習サポーターは環境の大切さをわかりやすく伝えるスポークスマンだと自負しています。

活動内容としては、環境ミュージアムという建物の中での種々の活動しているのが一つ（スライド 7, 8, 9）。二つ目は、出張ミュージアムといい小学校を主に学校や市民センター、公民館へ自分たちで出来るものをもって出かけます（スライド 10）。

三つ目としては、市の施設であるごみ焼却工場や下水を処理する浄化センターでのガイドを行っています（スライド 11）。

四つ目は、市民、親子、子どもなどを対象にした環境講座も開催します。

五つ目に、6月に実施される環境月間や10月に開催されるエコスタイルタウンという環境イベントなどにも参画します（スライド 12）。

テーマとしては、「公害克服の歴史」「地球温暖化」など、環境全般にわたっています。
 手法としては、トーク、工作、科学実験、クイズ、ゲームなど様々なアクティビティを展開しています。

環境学習サポーターは、これらの活動に生きがいを感じながら活動しています。

環境ミュージアムを活動拠点として 1

酒海湾の生態修復シミュレーション
 ごみの分別ゲーム
 おもちゃの病院
 環境3択クイズ

スライド7

環境ミュージアムを活動拠点として 2

どこがエコ?と消費者教育
 ペットボトルや菓子袋、しじみ貝などの廃材を利用した工作
 廃棄物利用の工作

スライド8

環境ミュージアムを活動拠点として 3

緑気ガスを調べる
 ガス検知管で調べる
 酸性雨のシミュレーション実験

スライド9

「出張環境ミュージアム」学校や市民センターへ

酒海湾クイズ
 グリーン購入しましょう
 授業参観で「3R」親子リレー
 国際理解教育
 南アジアのマングローブ林を壊したのは誰?

スライド10

ごみ焼却工場や浄化センターのガイド

ごみ焼却工場
 浄化センター

スライド11

**社会人、親子、子どもなど対象の環境講座開催
 「環境の日」などのイベントへの参画**

「環境の日」イベント
 サマースクール
 社会人対象の環境講座 エコタワシ作り
 ふろしき活用の環境講座

スライド12

記録係：国立科学博物館教育ボランティア 羽生 敏江
 会場係：国立科学博物館教育ボランティア 今村 知世子

第3分科会「ボランティアによる展示解説」

助言者：帝京科学大学教授
事例報告者：世田谷美術館学芸員
司会：国立科学博物館教育ボランティア

石田 戢
東谷 千恵子
木村 勲

事例報告：世田谷美術館

1 はじめに

今回、分科会が「展示解説について」ということなのですが、当館の活動は展示解説といわれるものではないと考えております。ただ、間違いなく、来館された方にサービスの一環として、ボランティアの方が美術館を御案内するということでは、展示解説というジャンルに当たるのではないかなと思ひ、お引き受けさせていただきました。

2 世田谷美術館について

世田谷美術館は公園の中にある美術館として、最寄りの駅からでも徒歩 20 分という不便なところ。開館が 86 年で、昨年 20 周年を迎えたところですが、展示会は、「大英博物館展」「ゴッホと日本展」「ムンク」「ジェームス・タレル」「メソポタミア」、去年「ルソーの見た夢、ルソーの見る夢」など色々行ってきました。現代美術から国宝まで、国内外を問わず、さまざまな企画展を行っております。

コレクションは約 1 万点持っております、3 本の枠があります。ひとつはアンリ・ルソーを代表とする素朴派やアウトサイダーアートなどを中心とした近現代の作品。素朴派を一言で言いますと日曜画家でしょうか。アカデミックなところにのっとりしないで、好きで、独学で、エネルギーな絵をかいていたような作家を当館では多く集めております。代表的な作家がアンリ・ルソーだと言っておきながら、ルソーの作品は 4 点しか持っておりません。

二つ目は、世田谷区在住の作家です。世田谷区は著名な在住作家が非常に多く、県立美術館並に、もしくはそれ以上に在住作家だけでも展示会が開けるとするのが自慢です。たとえば、いろいろ話題のアラーキーこと荒木経惟さんなども区在住の方です。

それから三つ目は塩田コレクションと呼ばれる北大路魯山人の書と陶芸のコレクションとなります。

当館の特徴としまして、開館以来、展示会だけではなく、いわゆる催し物、講座、ワークショップ、などにとっても力をいれております。当館は学芸員が 15 人いるのですが、そのうち三分の一が教育普及専門の学芸員です。例えば、展示会関連の一般対象や子供のワークショップ、中・高生対象のパフォーマンスのワークショップ、展示室でのコンサート、そんなことも年間を通じ、多数開催しております。

3 鑑賞教室について

今日の話の中心になる鑑賞リーダーですが、当館では、いつの間にやらついた愛称が「美術館を楽しむ達人たち」となっています。

活動を開始したのが 97 年の 6 月ですので、ちょうど今年で 10 年になります。当館では、開館以来、世田谷区の小学生が授業の一環として全員来館する「鑑賞教室」という事業をおこなっています。96 年のある鑑賞教室のときに作品に危ないようなことがありまして、それをきっかけに、事業そのものを見直すべきでないかという話が出たのでした。その対策として考えられたのがこの鑑賞リーダーというシステムです。当初 36 名で始めたのですが、どんどん呼びかけに応じて人がふえ、現在は 360 名に上る形になっています。

当館のボランティアは、特に、いつ募集とか何期生という制度は全くとっておりません。随時募集、いつでも、どなたでも登録が可能です。多くの美術館がボランティアを試験で選考するという事態になっているのは、多分、活動できる人数の制限があるためだと思います。例えば、週 1 回活動するとして、毎日 1 回ガイドツアーをしたら、極端な話 7 人いれば、それ以上必要ないのかもしれませんが。ですので、多くの美術館では 30 人とか 40 人とか、「少数精鋭派」という形をとっているのだと思います。しかし、当館のこの活動は、1 日に、下手をすると 300 人ぐらいの子供たちが 1 度に入ってくるわけで、例えば 100 人の子供たちが来たときに、5 人に 1 人リーダーをつけたかったら、リーダーの数はそれだけでも 20 人要るわけなんです。これが平日、ほぼ毎日続くわけで、1 日に平均 20~30 人のボランティアの方が必要というのが当館の実情です。そのため、みっちりとした研修を全部終えて、完璧になってからスタートするという余裕もなく、とにかく明日もう 1 人欲しいんだ、明後日もう 2 人足りないんだという状況で 10 年間進めてまいりました。

鑑賞リーダーの活動の中心になっているのが先ほどお話した鑑賞教室という活動です。世田谷区立の全小学校 64 校の 4 年生、年間約 5,000 名が学校行事として来館いたします。実は、これは、もともと教育委員会のプロジェクトとして初めから組み込まれておりました。今いろいろほかの美術館の方から、同じような鑑賞教室をおこないたいと御相談を受けるのですが、これを美術館から言い出して、一からやろうと思うとかなり大変だろうと思います。当館では、当時の世田谷区長が、美術館設立時に、一部の人たちだけが使う美術館ではなく、すべての区民のための美術館とすべく、世田谷区に住んでいる小学校 4 年生が全員来る鑑賞教室をおこなうことを決めたのです。ですので、開館の翌年からこの鑑賞教室は行われています。

当初は、4 年生 5,000 人と中学校 1 年生 3,000 名、あわせて 8,000 名が年間訪れるというプログラムでした。ただ、中学校 1 年生に関しては、団体での来館というのが何年目かになりました。このことについてはまた追ってお話をいたします。

子供たちの来館の際に、5 人から 10 人のグループに分けて、1 人から 2 人の鑑賞リーダーが案内するという、という現況のシステムは、鑑賞教室開始後 10 年経ってから始まりました。それまでは、ただ子供たちは 100 人ぐらいでバスに乗せられてバツと連れてこられて、下手をするとどこに来たのかも本人覚えていない、ということがよくあったように思います。何を見たのかも覚えていない、何しに来たのかもわからない、例えば、友達同士でおしゃべりをしてしまって、「きょうの給食なんだっけ」と言って、話をしたまま帰っていく、これでは何の意味もないのではないかとと言われることも多々ありました。

それから、もう 1 つ、鑑賞リーダーがいなかったときには、毎日のようにお客様から苦情がきました。そこらそこらで子供たちが騒ぎまくっていて、その中で、「観覧料、返せ」と、言われたこともありました。あわやというところで作品に激突しかねない光景も何回も見てきました。

それから、これは、ちょっと別の話にもなるのですが、世田谷美術館では大人のための美術講

座というものも長期的にやっております。その中で、美術を鑑賞するときに本当に自分の目で鑑賞することは難しく、偉い先生をお招きして「はい、これがアートです」と言ったところで、その本人は自分のこととしては感じられないのです。どうしたら、自分の目で鑑賞ができるのか？ そんな疑問をずっと持ってきたわけです。鑑賞リーダーの活動はその解消の一つに当たりました。素直な目線の子供たちと一緒に、同じ展覧会を繰り返し見ることによって、自分自身の見方は間違いなく深まっていく。そういった体験を持てるという利点があります。

今、言った3つが、バランスよく、合わさり、今の鑑賞リーダーのシステムができあがりました。

鑑賞教室の全体像ですが、来館前には出張授業を行っています。出張授業を行うのは美術館のインターン(博物館実習生)になりますが、鑑賞リーダーも一緒に行き、お手伝いをしています。出張授業は、大体、前の日とか3日くらい前に学校に出向き、展覧会に合わせたワークショップをおこなっています。例えば、去年、版画の展覧会にやった事前授業では、プラスチックの食品トレイを使った簡単な版画を体験してもらい、版画とは何かをわかりやすく考えてもらうような授業をおこないました。当館の活動では、ボランティアの方に、これをしてくださいということはきちんとお願いしていないんです。その場で、その方が気がついたこと、できることをしていただいていますので、ボランティアの中にはいつからか自発的に、授業の全記録をとって下さっている方もいます。

鑑賞教室の来館は、1日大体1、2校です。当日、リーダーの方は、正直何人来るかかわからない状況です。一応、暫定的にスケジュールは出しているのですが、そこは皆さん社会人ですので、急にキャンセルになったりとか、また急に都合がよくなったりします。この日にありますということをリーダーの皆さんにお知らせしておいて、その当日に集まった人数で子どもを分けるということにしています。リーダーに一人一人グループを分けて、「では何時にどこどこに集合です」とお伝えしてからは、何もかもすべてリーダーの自由にお任せしております。

出張授業は企画展を中心にやっていますので、ほとんどの方がやはり企画展はごらんになります。ただ、一度に企画展に全員入ってしまいますと企画展の入り口が大変な騒ぎになってしまいますので、リーダーには、できるだけ人のいないところから行ってくださいとお願いはしています。なので、収蔵品展から見るグループ、企画展から見るグループいろいろあります。また、それぞれリーダーの中には自分の組んできたストーリーというものがありますので、絶対にここから見せたいというものを持っている方もいらっしゃいます。そういった場合にはどこかで時間をつぶしていただいて、例えば自己紹介をしたり、今まで美術館に行ったことある？ など、お話をしながら時間をつぶし、あいたらすぐに入っていただくということもそれぞれのリーダーの判断でおこなっていただいています。

作品と同じポーズをとらせるなど「踊らせる」のが好きなリーダー、「座らせる」人、「寝かせる」のが好きな人、さまざまで、自由に鑑賞していただいています。よく床に座らせるのはマナーが良くないのでは？と言われることもあるのですが、子供は動きが速いので、座らせてしまった方が実は安心なのです。じっくり、1つの絵を30分でも時間をかけて見てもらえると大成功かなと思っています。

鑑賞リーダーには館として特にこうしてくださいというお願いを一切していないということもありまして、案内の仕方はさまざまで、たくさんお勉強をしてくださる方もいらっしゃるし、「まだ展覧会を見ていないんだけど」というリーダーも中にはいらっしゃいます。美術館として

は、どちらでもかまわないと思っております。

大体、どういうお話をしているのかといいますと、本当にその時々なのですが、私としては、特別なことは何もしなくてもいいですよというふうに話しています。初めての目で子供と一緒に見ていただいて、いいのです。例えば、お父さん、お母さんでも子どもと展覧会などに行くとき、事前に学芸員のレクチャーを受ける人というのはほとんどいないと思いますので、それと同じように、同じ目線で見てくださいとお願いしています。教えることよりも感動を共有することの方が、ずっとよい体験になると思います。ただ、「質問を受けたらどうするんですか」と新人のリーダーからはよく聞かれます。そのときは、私は「質問返し」というテクニックをお教えしています。「これ、何描いてるの?」「何描いてるんだと思う?」というふうに返すということです。子供はそう言うと本当に真剣に、「うんとね、これね」と、よく考えて話してくれます。例えばある作品を、作家が何をどう考えて作っているかということが重要なのではなく、これが自分にとって何に見えるのか?という話をするの方が重要なのではないかなと思っていますので、できれば問かけは話が膨らむ方向でと考えています。正しい答えを教えることが美術の解説ということではない、という考えのもとに行っています。

例えば難波田龍起さんの『生の記録』という作品が、当館では子供たちに一番人気なのです。抽象画なので、子供に難しいのではないかとおっしゃる方も多いんですけども、逆に、もし、想像を広げ、話を膨らませる方向で会話をしていくときには抽象画の方がよほど話が続きます。本当に20分30分座って、みんなで場所の取り合いになったりして、子供たちと話をすることができます。例えば、私の聞いたものの中に、中央にキリスト様がいたりと言った子がいたりとか、ペガサスがいる、馬がいる、川がある、森がある・・・と本当にいろいろな物語を子供たちから聞くことができます。

ただ、企画展もやっておりまして、中には、歴史的な資料の展覧会もあります。このときには主に、どちらかといえば男性のボランティアの方が、それを機にすごく勉強される事が多いです。そういうときは、「美術館が好きなんだけれども、この展覧会の知識はない」というタイプのリーダーのグループは、「あのおじさん、詳しいから、あそこに聞きに行こうよ」ということで、グループがまざってしまうこともあります。グループを絶対、最後まで守らないといけないということではなく、知っていそうな人がいたら知っているところに行ったりして話を聞くということも全然かまわないということになっています。

もちろん展覧会だけではなく、館内の諸施設にもいきます。ライブラリーでは、関連図書や子供たちが好きそうな本を出しておきますので、ここで本を読んだり、またここは無料でいつでも来れるから、特に夏に暑いときなんかクーラーがガンガン入っているから遊びにおいでという話をしたりしています。

また、当館は地下に版画室、彫刻室、それから絵画のアトリエがありまして、週に1回、もしくは2回ぐらいは大人の方を対象とした講座をおこなっています。そういったところにも鑑賞教室で行ってもらおうようおすすめしています。プロが書いた作品よりも、子供たちは、今、目の前で何かが生まれているというのがおもしろいようですし、また、大人の方が授業を受けているというのが興味深いようで、展示室ではかなり騒がしかったのが、ここでは大変おとなしくいい子になって真剣に話を聞いていたりもします。

時間が余ったら屋外も回ります。これも屋外の彫刻です。これだけは美術館でさわっていい作品なので、みんなペタペタとさわります。

最後はエントランスで集合です。晴れているときにはだいたいエントランスに集合になります。ここで全員そろって最後にごあいさつをしたら、手を振って、見えなくなるまでお見送りをして終わりになります。時間として、大体子供たちが入るのが10時、解散するのが11時半ぐらいでしょうか。給食の時間に合わせて学校に帰りますので、遠い学校ですともっと早く帰りますし、近い学校ですと、11時50分、12時ぐらいまでいることもあります。

当館ではまず、その場で何かを教えたり学んでもらうことよりも、また来てもいいな、と思ってもらえることが、第一だと考えています。そのために、美術館からこうこうこうしてくださいとマニュアルを渡すのではなく、やはり生身の人間が、今、生身の人間を見て、その子が一体何を言いたいのか、それをきちんと聞いてあげること、それを一人一人、ボランティアの方が工夫して、対応することが大切だと思います。

もちろん、何も教えないわけではありません。例えば、子供たちはすぐに近くで見たがるので、「遠く離れた方がよく見えるよ」なんてことは教えます。ただ、その作品がどういう作品なのかは、あらかじめ教えないということです。

例えば作家がすごく悲しい気持ちでかいた絵があったとします。ある子が、それを見たときに、何て楽しい作品なんだと思ったら、別にそれを間違いだと指摘する必要はないと思います。今、その子が感じたことをそのまま拾ってあげる。ただ、そこで「ふーん、そうなの」で終わるのではなく、何でそう思ったのかということ、そこから話を広げていき、もしその子が興味を持てば最終的に、でも、実はこの作品は、この人が描いたとき、すごく悲しかったんだよという話まで持っていければ、いいのだと思います。でも最終的にはその子の心が受けとめたものが、その子にとっての正解なのです。これが美術の見方だと思います。子供に限らず、恐らく大人も同じだと思います。

学校の授業は厳しいようですが、美術館ぐらいは自由に、そういったことを楽しんでもらえる場所、それを認められる場所であってもいいのではないかなと、この10年の活動を通して、ボランティアの方々と話し合ってきました。

いままでお話ししたような活動は、もちろん数の問題もありますし、もしくは経験の問題もありますけれども、美術館の職員よりもずっと今いらっしゃるボランティアの方が、上手なのです。そういう意味でこの活動は、ボランティアの方にお願ひしなければできない活動だと思います。いろいろな子供たちがいて、みんな違って、美術館はそれを認める場所でありたいという、そういう気持ちのもとに鑑賞リーダーは子供たちと一緒に展覧会を見ていく活動をしています。

4 鑑賞リーダーによる活動の発展について

平日に主に行う鑑賞教室が活動の中心ではありますが、土日に活動したい、また、団体の鑑賞サポートだけでなく、もっと積極的な活動をおこないたい、という声があり、活動は拡がりつつあります。たとえば、先ほど言った中学校1年生の鑑賞教室ですが、現在は夏休みを中心に各自で来館します。そこで夏休み期間中は、リーダーが展示室に必ず常駐するという行っています。これは、もともとリーダーからの提案でおこなわれるようになりました。そのように、ボランティアの方から直接提案をいただき、活動をどんどん広めていっています。また、100円ワークショップという活動があります。普通、美術館のワークショップというのは、10日前往復はがき必着というタイプが多いのですが、それでは参加する子は限られてしまいます。その場で誰で

も参加できるワークショップを、とボランティアの方から提案があり、簡単な工作を土曜日、もしくは夏休み期間中に行っています。それから、大人の方のギャラリートークも事前予約でおこなっています。解説するより一緒に楽しく見て、どんな話ができるのかというように、鑑賞教室の案内と同じ方針でおこなっています。そのほかにも、幼稚園児の鑑賞教室や目の不自由な方を対象にしたギャラリートークもおこなっています。また、去年のルソー展など企画展関連のワークショップなどにも協力をいただいています。

それから、特に熱心なリーダーを対象にした勉強会もおこなってきました。鑑賞教室で子供たちが来るにもかかわらず、美術館の展示は基本的に子供たちに見せることを前提にはつくってはいません。そのことにリーダーからは時々不満をいただきます。例えば展示台が高いとか、絵が高い、解説が読めない、漢字が難しい、Hな絵がある…。あるとき館外展をやる機会がありまして、その館外展ではほとんどお客様は子供しか来ないという問題を抱えていました。ではいっそ今までの不満を全部解消すべく「鑑賞教室を前提とした展覧会」をおこなってしまおうと、鑑賞リーダーと教育普及課の学芸員とで勉強会を重ね、展覧会を開催しました。00年と01年と02年です。作品選定から全部一緒に決めて、鑑賞教室もおこないません。来年の夏ぐらいに、今度は当館の収蔵品展で、鑑賞リーダーの経験をもとにした子供のための展覧会ということ、現在計画をしている最中です。

5 質問をうけての補足説明等

Q. インターン制度について教えて欲しい。

A. 10年前から開始しています。現在、学芸大学のみですけれど、そちらからインターンを募って、年間10人ぐらい登録し、大体5月から12月ぐらいまでの期間、週1回ぐらいで美術館に来ていただいています。担当の学芸員がついて、一緒に授業を練っていきますが、基本的にアイデアを出すのはインターンです。また授業を実際におこなうのも、そのインターンとなります。担当の学芸員は付き添いという形で同行します。出張授業では、それプラスボランティアが5～6人行って、授業をおこないます。1人の学芸員が3～4人ぐらいを担当する形で指導していきます。

Q. 鑑賞教室の学年を小学4年生にした理由は何でしょうか。5年生、6年生と色々考えられると思うのですが。また、一般の方に対して展示解説をボランティアの方がされる機会について教えてください。

A. まず学年の設定なんですけれども、もともと5年生と6年生には、当時、別にもう館外授業が入っていたんです。ですので、必然的に4年生になったというのが当時の事情です。ただ結果的に、現在、4年生がベストだという確信を持っています。3年生だと子供過ぎる。5年生だと、もうちょっと生意気になってくる。4年生ぐらいが一番、一緒に作品を見るのにふさわしいなと思っていますので、ほかの美術館から聞かれたときには、やはり4年生をお勧めしています。

次の御質問なんですけれども、大人のためのギャラリートークは、展覧会によっては、定期的にやっていたこともありましたが、現在は予約のみになっています。5人以上のグループで、大体1週間ぐらい前までにお電話をいただければ、鑑賞リーダーのどなたかに来ていただいて、御案内します。そういった御依頼をいただくのは年間10数回でしょうか。

Q. ボランティアの人がそれだけおられると、連絡とか意思の疎通がうまくいかないのではない

かなと思うんですけども、その辺はどうされていますか。

- A. 事務的な面はすべて学芸員でやっています。方法としてはメールを使う方向に徐々に移って
いっています。それに対応できない年配の方には文書です。緊急以外には電話はないです。
子供たちのスケジュールが決まりますので、年に何回か定期的に事前にこういうのがある
という案内をだし、登録をしてもらいます。それをベースにして多い場合、少ない場合で調整
を図っております。ボランティアの会みたいなのがあるわけではないです。また、ボラン
ティアの方の半分ぐらいは当館の美術大学という講座の出身者で、その講座自体には同窓会
のようなものが各期にあります。鑑賞リーダーとはまた別ではありますが、そういう方がた
同士は会う機会が皆さんあり、鑑賞リーダーのことも話題になりますので、それも横のつな
がりの一つになっているかと思います。
- Q. 基本的に鑑賞リーダーの方に内容をまるっきりお任せしてしまうということに対して不安
はないのでしょうか、もしやり方に少し問題があるなと館側で感じるようなことがあった場
合にどういった対応をされていますか。
- A. 美術館の楽しみ方は館が決めるものではないので、基本的に不安はないです。しかし、やは
り10年やっていると、中には何回か、「あっ、これはまずい」ということは当然ありました。
そう思ったときには、すぐ話し合うことで、それ以上、そんなにもめたことはありません。
しかし、こんなこともありました。美術館では作品にさわってはいけないというルールが現
在ありますが、彫刻はさわらないとわからないという信念をもっているリーダーがいて、子
どもたちの前でこっそりさわっていたんです。2回、3回と見つけるたびに注意して、「で
もやはりさわらないとわからないと思う」と言われたときには、申しわけないけれども、最
低限の館の決まりを守っていただけないのであれば、とやめていただきました。

記録係：国立科学博物館教育ボランティア 笠原 千津子

会場係：国立科学博物館教育ボランティア 紀伊国 節子

大湯 ふじ子

第4分科会「地域との連携」

助言者：東京大学大学院准教授
事例報告者：平塚市博物館協議会委員・平塚の空襲と戦災を記録する会
司会：国立科学博物館教育ボランティア

鈴木 眞理
江藤 巖
齋藤 嘉博

事例報告：平塚市博物館

1 はじめに

私は平塚市博物館で、博物館協議会委員をしており、また別に「平塚の空襲と戦災を記録する会」という、これは博物館の中の歴史関係の分野に入りますが、そちらの会のボランティアもやっております。

私どもの会は、博物館の中の歴史分野に入っておりますが、空襲と戦災だけに絞って活動をしている団体です。現在、常時集まるメンバーは約13名です。外での活動は少なく、大体が室内で会議とか資料の調査などをやっております。

2 空襲体験者の証言の収集と証言集の発行

最初、平塚の空襲の体験者に直接体験談をお聞きするということからスタートをしました。この会がスタートしたときには、当時の国鉄（現在のJR）OBの方が非常に多く募集に応じられました。この方たちは、既に国鉄OBの中で平塚の空襲についていろいろお話し合いをされていたようです。この方たちがメンバーとして集まり、証言者を集めて体験談をお聞きし、証言集をまとめることから始めようということになりました。国鉄のOBの方は非常に知り合いが多く、証言者もたくさん集まりました。お一人お一人、博物館に来ていただき、博物館の会議室をお借りしてお話を聞くということをやっていました。1989年から始めていますが、当時ICレコーダーのような音をとる機械はほとんどなく、全部会員による筆記でやっており、1日3人ぐらいが限度でした。中には高齢で博物館にもこれないという健康状態の方がございまして、そういう方には複数の会員がお宅へお邪魔して証言をいただきました。

こういう証言をとる上で一番問題になりましたのが、証言をされる方が、ある1つのことを非常に誇張をされたり、自分の思いを入れてお話しするという方がいるということでした。いろいろと今後問題が出るだろうと学芸員から指摘があり、聞き取っている我々会員がマニュアルをつくりました。そのなかで、証言集として将来に向かって全部記録して残しておくことを考え、体験談の中で「何とかであろう」とか「何とかであったと思います」ということを載せるというのはいろいろと差し支えてくるので、こういった発言は明確に、「思いました」ではなく「そうでした」ということを会員が確認する、「それは確かだったんですか」ということを確認していくと決めました。

139名の方から証言をいただいた段階で、1冊の本にまとめることになりました。市民の会がいろいろな方に会って証言を受けたということから、テーマを「市民が探る」ということにし、今後いろいろ発刊していく上で、このテーマをそのまま出そうということになりました。まず第1冊目として、『市民が探る平塚空襲（証言編）』として発行しました。約300ページの本になり、

いろいろなグラビア，現在の写真や被災した市内の地図も載せました。被災した市内の地図はこれの中で圧巻ともいえます。こういう地図は博物館にもございませんし，どこを探してもなかったものですから，会員が自分の足で歩いて聞き取り，1軒1軒所帯別に，ここが焼けて，ここが焼け残ったという情報を全部入れてつくりました。この被災地図を地域別に分けてその本に全部載せ，それぞれの地域で被災した方に受けた証言をそこにまとめていくという形にしました。

証言を集める活動は現在もずっと続けております。現在では証言される方も非常に高齢になりまして，「昔のことはもう，ちょっと覚えていないんです」とおっしゃる方や，既に62年たっているのですが，まだ非常に空襲そのものに対してこだわりをお持ちで，あの手この手をお願いしてもやはり受けていただけないという方もおられますが，活動は続けています。現在では大体偶数月に証言者の方に来ていただいて証言していただいています。その合間に会員が証言をしていただく方を探す，あるいは博物館に直接御連絡を頂いたあと，その方にこちらからまたお願いに上がるということをしておりまして，その「証言編」が出た後，大体60～70人の証言者の方が出てきていただいております。証言が10人ぐらいまとまりますと『炎の証言』という冊子にまとめて載せています。現在12号になっております。

3 行政資料の整理と刊行

博物館の中には，平塚空襲のころのいろいろな行政資料が収蔵されております。平塚市役所は戦災を受け，そのころの資料は一切残っておりませんでした。ところが戦後，平塚のすぐ隣にあります大野町という役場が残っており，こちらにその当時のいろいろな資料がございまして，戦後，平塚市と合併した時点で，こういった資料も全部平塚市に移管し，それが博物館の方に収蔵されております。本当に雑な，ちょっと持てばポロポロと崩れるような紙を使って，当時は大体青インクを使って書いてあるんですが，これももう薄れてきているという状態です。証言の収集と並行して，こういった収蔵されている貴重な資料を全部活字に変えていくことをはじめました。学芸員の指導によりまして筆耕をして，それをコンピューターで入れ込んでいくという作業をずっと続けております。

先ほど申し上げました市の「被災地図」というのは，平塚市が合併する前の旧市内の地図でございました。行政資料のまとめに入りました時点で，近隣の市町村の「被災地図」をそれぞれの地域の方にお声をおかけして，足で歩いて全部つくっていく作業をやりました。近隣の市町村の「被災地図」と行政資料をリンクさせ，その結果を『市民が探る平塚空襲(資料編)』として，3分刷にして出しました。

私どもは一般市民のボランティアになるんですが，非常に博物館に感謝している点が1つございます。というのは，こういった本を刊行するとき，「平塚市博物館刊行」ということで出るのが普通ですが，ここに，「平塚市 平塚の空襲と戦災を記録する会編集」という字が全部入って，これを実際に動いてやった人はだれかという主催者をちゃんと出していただけました。この点に関しては非常に感謝をしております。お手伝いをしていただいた市民の方は，巻末に協力者として名前を載せていただき，そういう点では直接協力をいただいた市民の方も非常に喜んでいらっしゃいました。そういう方は会のメンバーには入っておりませんが，その後もいろいろなことでもお願いに上がりますと御協力して下さっています。

4 展示について

今まで刊行物の活動について話をしてまいりましたが、このほかに、もう1つ大きな活動として展示がございます。平塚市博物館は平塚空襲についての展示を、まだ我々の会が発足する以前に1回やりましたが、それが大きな反響を受けました。そこで2回目をいつかやろうと博物館で立案し、1995年がちょうど平塚空襲の50年記念になるので、その50年を記念して大きな特別展をやろうという企画が出ました。その話が我々の会にも参りまして、会としても全面的に協力していくことになりました。

ところがこのころに、アメリカのワシントンにある国立公文書館で太平洋戦争のころの軍のいろいろな作戦の報告書などの資料がすべて公開されているという情報が入りました。これを逃すことはないということで、一度アメリカに行って、その資料を集めてこようという話が博物館側から出て、会員もそれはぜひ欲しいと思い、博物館の当時の学芸員が調査に渡米するという事について博物館の内部を説得に努めました。しかし、当時、学芸員1人の資料調査のために、海外へ行くということは認められないという結論になり、博物館側として動くのは断念せざるを得ないということになりました。それで我々の会で全面的にバックアップしようという動きになりました。資金的な問題などを、先ほど言いました国鉄のOBの方などが中心に全面的に動いてくださったりして、結局、博物館の担当学芸員、それから博物館の職員の方がもう1人参加し、我々の会員がもう1人自費で加わり、合計3人でアメリカに渡りました。2週間行きまして、3本の映画フィルム、90点に及ぶ写真の資料、若干の記録文書を集めてまいりました。その後、総がかりで、これを全部翻訳し、そうしたものがまとまってまいりました。

集めてきた資料を特別展に出しました。写真資料とか、映画もちょっと映したということも聞いておりますが、これが大きく新聞報道されました。『44万7,716本の軌跡』という題で冊子をつくり、特別展の後で出しました。この特別展の時、我々の会でも一緒に寄贈品を使って展示を出すということをやりました。これがまた反響を呼びました。このときの展示の期間は40日間でしたが、この間だけで約2万人の人がいらっしやるほど反響が大きかったです。実は私はこの会に入会したのが、この50年の特別展を見たときがきっかけでございました。

展示についてもその後、我々の会員も事あるごとに博物館のお手伝いをさせていただいております。また、この展示をきっかけに、7月16日が空襲の日なので、7月8月を市が主催しまして「平和月間」としてあります。「I LOVE PEACE」という呼び方をしておりますが、毎年7月8月にいろいろな平和事業をやっています。これに合わせて、博物館では「平和展」、「平塚空襲展」として、毎年毎年、我々の調査や学芸員が調査した結果、あるいは新しい空襲関係の寄贈品などを展示しています。

5 そのほかの事業

空襲をされた町ですので、戦跡が残っております。ただ年々、こういったものがだんだんに減っています。平塚市には旧平塚市と同じぐらいのスペースを持った海軍火薬廠というのがございまして、こういった海軍の施設があるので平塚が空襲されたと感じている人が一般市民には多いです。我々が証言を聞きましても、皆さん、ほとんどそれをおっしゃっていました。ところが、米軍の資料を調べたり、私どもがいろいろ方々から資料を集めたりしてきますと、ちょっとそれは違うと思いはじめました。現実には平塚海軍火薬廠の空襲による被害というのは、米軍の資料では5%としか出ていないんです。ほとんどが残っているということなんです。海軍火薬廠が目標でやられた空襲であれば、壊滅的になっているだろうと思っていたのですが。市街地の方は約80%の被

害を受けているわけです。調べているところしたところに疑問点が出てきます。最近になっていろいろ資料がたくさん見つかり、今博物館の学芸員を中心にして資料を絞りつつあります。もう2年後にははっきりと、平塚の空襲はこういうことで空襲されたのだということを言い切れるような資料になってくると思っております。

戦争遺跡は、海軍火薬廠は5%の被害しかありませんのでほとんど残っていました。その後、この土地がすべて民間企業に払い下げられました。そのうちの半分ぐらいに相当する面積で、当時の農林省の園芸試験場というのがあり、それが、今から約30年ぐらい前に平塚市に移管されました。この後、市が総合公園というのをつくっております。運動公園、動物公園、植物公園、防災関係の施設、野球、サッカーの設備があって、市民が非常によく利用しています。この総合公園の中に戦跡がちょっと残っており、学芸員や我々が一緒になって、一般市民の方を時々公募で集めては、「戦跡をめぐる会」ということをやっています。

ここ2～3年は、「戦争体験を語り継ぐ」活動、すなわち継承活動が非常に多くなってきております。その理由の1つは、小学校で総合学習という科目ができて、この総合学習で平和の意味や平塚市が戦争時代どうだったかということ調べる学校がふえてきて、こういったとき子ども体験者が呼ばれて体験談をお話するのです。そのときにお話だけでなく、博物館に収蔵してある、先ほどの米軍の資料やら、あるいは実際に市民から提供された、例えば焼夷弾であるとか、そういったものを持ってまいりまして、実際に見せながら、あるいは手に触れながら、体験談をお話するというのを続けております。市内の小学校、あるいは高校、中学校、それから、自治会とか、あるいは宗教団体などから博物館にいわば「派遣要請」が参ります。博物館の学芸員が、学校の意向も聞きながら調整し、我々の会にどこそこの学校で何人、要請側の意向に合ったような体験をされた方は・・・と話をまわします。我々のメンバーは現在13人なんですけど、そのうち8人が実際に体験した方なので、そういう方に行っていただいて、お話をさせていただいています。平塚市の場合ですと、小学校の社会科の副読本に、『私たちの町・平塚』という本があり、そこに「戦時中の皆さん」というテーマがあり、その中に、「実際に戦争を体験した人の話を聞いてみよう」というコメントが入っているので、熱心な先生が依頼をしてきて、私どもが派遣してということをやっております。

あとほかに、子どもはいろいろなほかの団体とも交流がありまして、子どもが受けております情報は、こういった団体からのものが特に多いです。中でも1つ、平塚市博物館にちょっと特異な団体交流の機会としては、「博物館まつり」というのがございます。平塚市博物館には、子どものように活動しているサークルで常時動いているのが15団体ございます。これは、民俗・天文・歴史・生物・地質・考古などの分野の中で、それぞれ関心を持たれた一般市民の方が、それぞれ担当の学芸員の指導、あるいは御協力のもとに、月1回、毎月、決まって活動しております。こういう団体の1年の研究成果を公開して平塚市博物館のサークル活動について一般の市民の方に知ってもらうこと、かつそれらサークル間での交流を目的にして、年に1回「博物館まつり」というものを開いております。来年の2月で第9回になります。これは全部、ボランティアのメンバーが実行委員会をつくりましてすべて動かしております。こういう団体とのつき合いなどもあります。

6 おわりに

平塚市博物館のサークル活動は、いろいろお話を聞きますと、20代、30代の方が参加されて

いるということもございますが、ざっと見る限り、大体 50 代以上の方が圧倒的に多い。特にリタイアされた方々が、男女を含めまして核となっていると思います。けれども最近2～3年ぐらいでは、生物分野とか天文分野などですと比較的入りやすいということで、若い方が家族連れ、あるいは子供さんだけで見えているということが少し増えていまして、博物館やあるいは博物館協議会のメンバーたちから好感をもたれています。今後はどんどん若い層に広げていくようなサークルなどを立ち上げていって、どんどん市民に参加していただくということを考えていきたいと思っております。

記録係：国立科学博物館教育ボランティア 井上 三香

会場係：国立科学博物館教育ボランティア 大澤 宏

6. 国立科学博物館 教育ボランティア協力者

○歓迎の挨拶：太田由美子

○全体受付，誘導：三浦恵美，太田由美子，有田敬子，五十嵐邦享，木村勲，齋藤嘉博，羽生敏江，笠原千津子，井上三香，今村知世子，大湯ふじ子，大澤宏，小森喜雄，川鍋和代，紀伊国節子，歌門妙子

○展示室案内：細谷資博，内山麻子，北村晃二，永野肇，中村茂，清塚和子，千足けい子，真保千秋

○記録写真撮影：三沢泰助，山森平和

○情報交換会司会：有田敬子

※ 分科会司会，記録係，会場係は本文中に記載しました。

7. おわりに（謝辞にかえて）

本報告書の作成にあたっては，大勢の方々のご支援を頂きました。ここであらためて感謝申し上げますと共に，本報告書について，みなさまからの忌憚のないご意見，ご感想，ご批判をお寄せいただければ幸いです。

国立科学博物館
ボランティア活動・人材育成推進室
担当 松澤 裕子
熊野 有祐
齊藤 有里加

第7回全国博物館ボランティア研究協議会概要

発行日 平成20年12月

編集・発行 国立科学博物館展示・学習部学習課
ボランティア活動・人材育成推進室